

## Georg Schwaiger

# バイエルンにおける教会宗教の発展 啓蒙主義とカトリック改革との狭間<sup>1</sup>

### バロックと啓蒙主義

18 世紀の後半になってようやくカトリックのドイツに啓蒙主義の考え方が強く浸透し始めた。今やあらゆる階層において、特に学校制度と国民全員の指導を通じて、特に文化生活と教育状態を向上させる努力が活発に行われた。それは小学校から大学に至るまで、神聖ローマ帝国の世俗的および宗教的領域において非常に真剣に行われ、真に情熱的であることも稀ではなかった。啓蒙主義は、人によって考えていることもその考えを実現しようとしていることも違ってはいたにせよ、はっきりと自覚をもって人間に向けられていた。そして知らず知らずのうちに 18 世紀が進むにつれて世界観も生活観も、社会の上層部から社会構造の中間層へ、また下層へと変わって行った。人々は、測ることのできない幻想的な遠くことの代わりに見渡せる秩序を、情緒の横溢の代わりに理性的な明快さと冷静さを、天国 - 現世的華美よりも助けになることや役に立つことを人間の日常生活に求めた。啓蒙時代の人々にとってバロック時代の祭りの衣装は重すぎ、贅が多すぎるようになった。このように啓蒙主義は西洋史の最も大きな解放の試みの一つとなった。あまりにも圧迫するようになった歴史の重荷に対して、啓蒙主義は前史の原点に、すなわち人間を理性的存在として立ち返らせた。バロックの神秘的な天の光は批判の時代において徐々に自然と理性の光に置き換えられた。啓蒙主義の考えから個人の自由の強烈な情熱が起こってきたが、これは 200 年以上も前から欧州と世界を新たな口火へと動かしていた。

特徴的なのは、まだ古い形を引き摺っているにせよ、新しい国家の自己理解、家父長的な神の恩寵主義からの訣別である。啓蒙主義による人間の知的な力の強調、啓蒙主義の楽天的な進歩の信奉、知識獲得、思考と理性的な行動により人格を開花せよという啓蒙主義の要求は、いたるところで心を揺さぶるように作用した。国家は啓蒙的な考えを取り入れ、歴史にそれまでなかったほどずっと強く人間の領域に主導的に関わり、特にすべての領域の改善に努力を傾注したが、特に国民の福祉の最も重要な出発点として教育制度に力を入れた<sup>2</sup>。

選帝候領バイエルンでカール・アルブレヒト (1726-1745) の弱い統治力と輝きのない帝位のあと、マックス III 世ヨーゼフ (1745-1777)<sup>3</sup> は即位して直ぐに高名な啓蒙哲学者クリスチャン・ヴォルフとその弟子ヨハン・アダム・イックシュタット<sup>4</sup> を帝国男爵の地位に上げて、進歩的な文化政策を進めた。ある程度の啓蒙思想は 18 世紀の前期に既にバイエルンの宗教財団や修道院で見られるようになっていた。それが今は次第にあらゆる国家的、文化的、宗教的生活に浸透し、内的な発展の道を指していた。ミュンヘンでは 1759 年に設立された科学アカデミーのサークルで新しい方向が強く促進された。その前に学識有る宗教団体によって行われていた学術活動が長い間先行していた。ベネディクト会修道士ベルンハルト・ペッツ、アンセルム・デシグ、オリヴァー・レジボン、フロベニウス・フォルスター、さらにポリング出身のアウグスティノ会修道参事会員オイセビウス・アモットたちがここでは指導的な人々であった。

選帝候の宮中における啓蒙活動の推進力は国家法律家ヨハン・アダム・フォン・イックシュタットと宗教家の市参事会長ペーター・フォン・オステンヴァルトであった。国家教会主権が強くなって、その立法権がますます拡張された。司教たちのザルツブルク会議 (1770-1777)<sup>5</sup> における反対が国が急いで進める教会関係の改革にある程度影響を及ぼした。国民が親愛なる人と呼んだのも故無しとしない選帝候マックス III 世ヨーゼフの現実的な政治志向のお陰で、教条的な啓蒙主義の危険の多くは回避された。大きな古い教団は、1773 年教皇が停止したイエズス会よりも、一般に時代の要請を正当に受け止めた。18 世紀のバイエルンにおける個々の司教の大部分と高位の修道院は適度の特徴を帯びたカトリック的啓蒙主義を発展させたが、このことは国家と教会に対して期待を抱かせるものであった。急進的な声はただ散発的にだけ発せられた。このようにとりあえずバイエルンにおいては、隣のオーストリアと違っ

て、拙速で国民の宗教的信条を傷つけるような処置は取られなかった。しかし新しい教会政策の方針はさらなる発展の方向付けをしたことに変わりはない<sup>6</sup>。

後任のプファルツ - バイエルン選帝侯カール・テオドア (1777-1799)<sup>7</sup> の下で、国家教会の主権の方向が新たに強まったが、それは多分に教皇の支持によるものであった。1782年4月ピウス VI世はバイエルンで盛大に歓迎された。彼はウィーンの皇帝ヨーゼフ II世のところまで苦い経験を味わったあと、帰りにミュンヘンとアウグスブルクに立ち寄ることにした<sup>8</sup>。1784年にはさらにミュンヘンに教皇大使館を設置することができた。これによって選帝侯はバイエルンの国の教会を設立し、厄介な司教たちの裁判権を排除するという目的に近づけると期待した。教皇にとってはこれは時宜を得たものであった。というのはドイツにおけるフェブロニウス主義の思想を回避し、有力な帝国君主の援助のもとに教皇の権威を強めるというまたとない歓迎すべき機会であると思われた。人気のないカール・テオドアの統治のもとで啓蒙的な改革と偏狭でこせこせした神経質に反応した措置が不思議なくらい次々を成立したが、特に秘密結社啓明団<sup>9</sup>の発覚とフランス革命の勃発以後そうであった。

18世紀後半には選帝侯の命令が既に深く浸透していたにも関わらず、選帝侯領の世俗的および宗教的な旧体制がカール・テオドアが死ぬまで維持されていた。住民の信仰心の広い範囲で宗教的および世俗的支配組織の啓蒙主義的な改革はまだ深くまでは行われていなかった。決められた教会のお祭りや慣習による祭日、礼拝の行列および巡礼、盛んに行われた祈祷の儀式などの制限に対して明らかに彼らはほとんど注意を払っていなかった。地方は、特に外部の目から見れば明らかなのだが、「宗教的な顔」を帯びていた。歩くと2時間ごとに修道院に出くわした。バイエルンでは多数の宗教財団と修道院は残酷な終わり方をするまで、人々の生活のすべての領域で独自のが緊密な結びつきを作ることで、バロック文化を民衆に深く浸透させることに本質的に貢献していた。

偉大な法律家フリードリヒ・カール・フォン・ザヴィニはプロテスタントの出身で、ランツフート大学の教授として、そのときはもうモンジュラの省が地に落ちる変化をしている時代であったが、彼の父親のような友ヨハン・ミヒャエル・ザイラーの眼で国と国民を観察することを学んだ。1809/1810年彼は気遣わしげに書いている。「啓明団が始まる前に修道院がすべて残っているバイエルンを見ていたならば、この国を非常に好きになっただろうと思う」。そして彼は、政府が宗教的な構造を不器用な手で破壊したことを正直に遺憾だと述べた<sup>10</sup>。バロック時代の伝道師は「*Bavaria sancta*」つまり「聖なるバイエルンの地」について好んで話した。彼らはバイエルンの多くの教会、修道院、礼拝堂、伝道師養成所、貧窮院、巡礼者とその頂点には聖母マリアがいる聖者たち、を霊妙な奇跡であり、あらゆる階層の信心深さであると呼んだ<sup>11</sup>。この「聖なるバイエルンの地」、「バロック時代の人」の信心深さは一体何を意味しているのであろうか？ それはもちろん、行われていた宗教的な生活様式、あらゆる生活の範囲を包括する教会の宗教性である。それは中世から行われ、16世紀に一時的に動揺があったのち、17世紀後期と全18世紀を通じてはっきりした形を獲得し、あらゆる障害にもかかわらず、少なくとも旧バイエルンとフランケンおよびシュヴァーベンのカトリック地区において20世紀半ばまで生き続けてきた。現在のお年寄りには若い頃のこの教会の宗教的生活様式を自明の現実として経験してきたのである。

バロックという言葉は今日大方にとって造形芸術の分野の概念と結びついている。しかしバロック時代の芸術的な表現様式は幅広い、社会のあらゆる階層を包括するバロック文化に当てはまるものである。それには華麗な城や住居、喜ばしい教会の空間や荘厳な修道院だけでなく、同様に頑丈にまた美しく作られた工具、人々の日曜日の晴れ着、美しく彫刻し塗られた、聖なる三位一体と新郎新婦の守護聖人の付いた天蓋付き寝台、亜麻布の小箱や大箱、バター桶、重い錫の食器、巧みに輾轉加工された紡ぎ車なども含まれる。旧バイエルンではまさにバロック文化が深く信仰と結びついていた<sup>12</sup>。その時代はさまざまな生活形態が本質的に教会によって形成され、行われた最後の時代であり、基本的になお社会のすべての身分の人を含んでいて、19世紀の教会主義とは明確に異なるものであった。19世紀初めの強制的な修道院廃止まで、国の顔は信仰によって彩られており、今日なお識者にはその名残が感じられるのである。

今なおバロックの教会建築、特にバイエルンで後期に天才的に開花したロココの教会建築は最初の一歩を開くものである<sup>13</sup>。もちろんそれは広範囲のバロック文化の一部に関するもの

であるが、本質的なものでもある。教会建築芸術に関して司教座のある都市が重要であるが、宗教 - 教会分野およびそれを遙かに超えた精神文化の分野において特に旧バイエルンの宗教財団や修道院が重要である。

バイエルンのバロックおよびロココの教会、堂々とした修道院の建物、聖職者の住居には、復活した教会生活の高揚だけでなく、何度も曝された危険と何十年におよぶ意気阻喪の後に取り戻した自意識の勝利の感情やふたたび得た安心もまた反映されている。それでアルプスの北側の精神性および表現様式の完全な開花は、呪わしい戦争が終わったあと実現できたが、このことは宗教問題に火を点け、さらに急速にヨーロッパ規模の政治的な権力闘争に拡大したと言われている。

大きな修道院の建築は 17 世紀の初めあちらこちらで始まり、世紀後半にはさらに大がかりになり、18 世紀にその頂点に達したが、最初は華麗なものではなく、厳しい必要性に迫られたものであった。中世の壁は損傷し、住めなくなっていた。最後に戦争がいたるところに荒廃を残した。教会や修道院は付属建物と共に酷い、時には廃墟のような状態であった。今日のバイエルンのフランケン統治地区の中で、司教都市ヴュルツブルク、バンベルクおよび司教本部のあるアイヒシュテットが、1631 年スエーデン軍の南ドイツ侵攻以降、酷い目に遭った。アイヒシュテットは 1634 年に焼け落ちた。小さな司教都市フライジングを敵も味方も同様に略奪した。帝国都市レーゲンスブルクの聖職者は、1633/1634 年にこの都市が暴君ベルンハルト・フォン・ヴァイマール公爵の手に落ちたとき、宗教財団や修道院とともに同様の目に遭った。パッサウは 1662 年と 1680 年に火災によって焼け野原になった。なんとか建て直すことが出来る状態になると建築を開始したが、アイヒシュテットやパッサウのようにそれは困難で、長い時間がかかった。当然建物は新しい様式と時代の感覚に沿ったものとなった。

17 世紀、特にその後半において、またほぼ 18 世紀を通して、旧バイエルンにおける教会の建築活動は後期ゴシック時代に次いで非常に盛んであった。こうして司教区本部のある都市は新しい顔を持ち、これは今日まで多分に特色として残っている。今やザルツブルクとパッサウの大聖堂は新しい装いで聳え、フライジングのロマンチックな聖堂教会は荘厳な装いを得た。ヴィースとロッテンブーフのあるシュタインガルテン、独特のアナスタシア礼拝堂を持つベネディクトボーイエルン、ディートラムスツェルとディーセン、アンデックスとシェフトラルン、ロット・アム・インとヘーグルヴェルト、バウムブルク、ライテンハスラッハとマリエンベルク、フェルステンフェルトとアルトミュンスター、ローアとヴェルテンベルク、レーゲンスブルクのアルテカペレとザンクト・エメラム、マラーズドルフ、メッテン、ニーダーバイエルンのドナウラントにあるオーバーおよびニーダーアルトアイヒ、バイエリシェンヴァルトにあるフラウエンツェル、ヴィントベルクおよびリンヒナッハ、アルダースバッハ、オスターホーフエン、フォルンバッハ、フェルステンツェル、アスバッハ、上プファルツのヴァルダーバッハ、シュパインズハルトおよびヴァルトザッセンの教会が出来上がった。選帝候領バイエルンだけでもまだ沢山の重要なバロックおよびロココの宗教財団および修道院の教会を挙げることが出来る。さらに現在オーストリア領で 1777 年まで選帝候領バイエルンであったイン地区で、ランスホーフエンからライヒェルスベルクを経てゾーベンまでに素晴らしい司教座教会があり、加えてシュヴァーベン華麗な帝国修道院があり、これはオーストリアの大修道院の何倍もある大きさである。さらにフランケンの司教区の堂々たる修道院や僧院がある。それには現代風の建築、改築および設備が入り交じっていて、今日なおその芸術的な力は注目に値する。アンデックスあるいはザンクト・エメラムといった多くの地で様々な様式感覚の天才的な結合を達成させている。ザルツブルク、パッサウおよびフライジングのどっしりしたドーム建築、修道院や僧院の教会に加えて、国の辺鄙なところに至るまで溢れるほど沢山の大小の巡礼教会、教区教会や地区教会がある。

バイエルンのバロックおよびロココの教会はそこで祈る神の信奉と人々の喜びのために作られた。"Domus Dei et porta Celi" (神の家と天への扉) が多くの入り口に掲げられている。この教会は天の素晴らしさの写しであり、苦悩に満ちた現世で既に世の終わりの神々しさを映したものである。これらは社会で抑圧されている人民の血の汗と涙で作られたものでは決してない。この壮大で費用のかかる建築プロジェクトは確かに財政的に厳しいもので、時には負担能力を超えるものであったが、どんな場合でも下層の臣民に過大な負担を強いるものではなく、むしろ近隣の諸国の驚嘆すべき芸術的な開花にいたるまで、労働とサービスの提供があった。1 世紀半にわたるヴェッソブルンとその労働、あるいはヴェルテンブルク<sup>14</sup>の教会や修

道院の建築史は、1802/1803年の世俗化の結果、いかに精神文化の荒廃および時には地方の社会的貧困を招いたかという説得力のある証拠である。特にここで、自分たちの貧困に対して華麗な教会が、修道院あるいはお城は勿論だが、欠かせないという、真に信仰の厚い人民の心情を再び思い起こす必要がある。これはまた現在の古い世代の人々が若いころに経験した現実であった。旧バイエルンの人々、またフランケンとシュヴァーベンのカトリック地区の人々、にとってバロックおよびロココの教会は「綺麗な教会」そのものであったし、今もそうである。このことはまた19世紀および20世紀の初めにおいて教育を受け教養のある世俗の上層の一部はバロック的精神を持つ周りの人々に無理解と軽蔑を示し、さらには急進的な破壊まで行った。

しかし常に死の威厳を知るためのものである、歓び、歌い、鳴り響くロココの教会では、いわばローマ人への手紙の第8章が信者、すなわち救われた人々の栄光を芸術の言葉に翻訳されている。荘厳な神の家、教会音楽、金銀で作られた宗教芸術の高価な造形物、高貴な木や上質の蠟はそういう人々の揺ぎ無い信仰を示しているが、またイタリア、スペイン、フランスから刺激を受けた精神の広がりも表している。この世の苦しみのすべてにおいて、また常に経験する人間の負い目と罪に、既に浄められたキリストの十字架に始まった救いの光が差し込み、既にこの世で経験できる神の栄光、永遠の命、慰めを与える聖人の集団、これらはすべてキリストの血によって救われたものを含んでいる。神の褒め称えには信者のこの上なく幸せな慰め、碎かれることのない希望と喜びが緊密に結びついている。少なからぬ人民の集団、特に召使、職人の徒弟、日雇い農夫、日雇い労働者、の争う余地のない貧困は従って当時の目で見ると、教会によって慰められていた。現在の多くの社会学者や社会史学者はその中に過去における宗教と教会に対する自分たちの解釈を確認するためだけに見がちである。しかし歴史的な事実とは違ふ。信仰の厚い人々は、その生活について何を話しても、非常に貧しい生活のどんなことについても、彼の教会では保護されていることを知っていた。

旧時代の教会および聖人のお祭りは宗教的に重要であるだけでなく、全く自明のことであるが際立った社会的機能を満たしていた。休暇は、その言葉も行為も、国民の中流および下流階級には20世紀もかなり経つまで知られていなかった。しかし日曜日と教会暦年のホーフフェスト (Hochfest, lat. sollemnitatis) の他に祝日となった多くの聖人のお祭り、使徒および「聖母マリアの日」(聖母マリアの祝日)、その地の教会保護聖人の日、慣例として地域の教会のお祭りとともに祝った巡礼および信心会のお祭り、があった。この日曜日と祝日は、18世紀の半ば以降、すでに啓蒙主義の影響下にあったが、世俗的および宗教的当局によって規制されるまで、規制の成果が疑わしいものであったにせよ、1年の3分の1にまで及んだ。教会祭と巡礼祭は通常数日間行われ、時には1週間に及んだ。地域の教会保護聖人祭りは、少なくとも教区教会では、2日間祝い、本来の祭り当日は早朝ミサ、通常たっぷり1時間は続く説教、助祭付きの荘厳ミサ (levitiertes Hochamt)、行列、そして午後には教会守護聖人の栄光を祈り、翌日には鎮魂ミサ、リベラ (Libera) および死者の思い出にお墓参りを行った。地域の教会の大きなお祭りでは周りの教区の聖職者も修道院の人々の手伝いによってその教会の懺悔の椅子に座った。住民は通常、復活祭、ポルツィンクラ日曜日 (8月の最初の日曜日の恩恵日 (Ablaßtag)、万聖節/万霊節 (11月1日と2日)、クリスマス/新年 (新年優先)、および保護聖人または信心会のお祭りなどの際に秘蹟を年に4、5回受けた。さらに各司教区には義務のある風習のお祭りがあった。そういうことで修道院の信心会のお祭りは多数の近隣の村で大部分の住民にとって決まった懺悔と聖体拝領の日であった。当時懺悔をせずに聖体を受けることは稀な例外を除いて普通ではなかったし、それはピウスX世の聖餐式教令まで続いた。住民は教会のお祭りの美しさに、神の栄光、救ってくれる聖人、さらには人間の高揚のための贅沢な宗教的華麗さに喜んだ。これらの日には農家は家のことと家畜の世話だけを行い、それ以上の労働はしなかった。今日でも老人にとって "feiern" (祝う) という言葉は「働いてはならない」ということである。バイエルンおよびカトリックの全南ドイツにおいて労働組合による労働時間短縮の要求のもう何世紀も前に、労働と祭り、宗教的な高揚と演劇および踊りの大衆的な娯楽との健全で自然なリズムがあった。バイエルンの信心には常に人に優しい行列があり、その背後には同様に深い宗教的な真面目さがあった。多くの宗教財団や修道院は基本的に宗教的な高揚に貢献したが、しかしまた文化的な刺激と人々の社会的保全にも貢献した。

少数の例外を除いて、18世紀末のバイエルンの修道院、特に大修道院は、教団の精神、教育、財政に関して全く無傷であった。確かに後の世俗化委員はいろいろと宗教財団や修道院の多額の負債を確認した。しかしその原因を知る必要がある。それは費用のかかる大きな建物の他に、18世紀半ばの国家的修道院政策として高い特別税と厳しい資産制限があり、イエズス会教団の廃止のあと地域の高等教育制度の負担があり、90年代には革命戦争の結果新たな重い財政的、物質的負担がのしかかったからであった。この強烈な負担はすでに財政的資産に及び、修道院廃止の時代へと導いた。それにもかかわらず、いずれの場合も負債は相当な資産の蓄えで補われた。バイエルンにおける宗教財団および修道院の容赦ない廃止は、多くの啓蒙主義者が主張しているようなぼろぼろで死にかけているものに適用されたのではなく、高位の精神的、文化的機関に適用されたのであった。

国の主権者による聖職者の帝国等族の世俗化と修道院の廃止の考えはウェストファリア和約以降何度も浮上した<sup>15</sup>。修道院の廃止には、教皇によるイエズス会教団の廃止（1773）と80年代のオーストリアにおけるヨーゼフ主義的修道院還俗が弾みをつけた。それに加えて絶えずヨーゼフII世からプファルツ-バイエルンの選帝侯カール・テオドアに領土交換の話があったが、その際に司教本部もほぼ間違いなく含まれた。そうなれば相当な法的不安定性が生じ、帝国内の皇帝制度と帝国教会への名声を傷つけるに違いなかった、とカウニッツは大変に憂慮して振り返る<sup>16</sup>。しかし今日、フランスにおける大革命の勃発と教会財産の収奪以前に、ほとんどすべてのカトリックの国や領土で、宗教財団や修道院が国主によって廃止されており、フランスだけでも1776年から1780年の間に約458の男子修道院がトゥールーズの大司教を頭とする”Commission des réguliers”によって廃止された<sup>17</sup>、ということが証明されている。ピウスVI世はバイエルンの選帝侯カール・テオドアにはっきりといくつかの古い宗教財団と修道院の廃止を許可した<sup>18</sup>。その上1798年には1500万グルデンをバイエルンの宗教財団と修道院の資産から没収したが、それを売るつもりであることは明確であった<sup>19</sup>。帝国における聖職者の領地の終焉だけでなく、宗教財団と修道院の廃止も18世紀の後期にすでに準備されていた。ただ没収の程度だけがまだ問題であった。帝国における進行過程の最後の時期に、革命フランスに対する不運な同盟戦争が「帝国の懐から」補償金を奪い取り、リュネヴィルの和約（1801年2月9日）に従って全般的な収用行為が直接導入されるという、最後の一押しを与えた<sup>20</sup>。

## モンジュラの時代

自由意志かそうでないかは別にして教皇が支持した、バイエルンの選帝侯が18世紀の後半に行った教会政策を冷静に見ると、次のようなことが分かる。その後起こる古い教会制度の激震と国家教会主権の完成への道は既にモンジュラ以前に準備されていた。1799年2月20日新しい選帝侯マックスIV世ヨーゼフが大臣モンジュラを伴ってバイエルンの首都ミュンヘンに入ったとき、新しい時代が始まった。嫌われた選帝侯カール・テオドアの治世のあと、新しい国主は大きな歓呼をもって迎えられた。選帝侯は多額の借金の遺産を引き継いだ。選帝侯および国王としての治世（1799-1825）の間に、特に大臣モンジュラの政治家としての能力によって新しいバイエルン国家が誕生した<sup>21</sup>。

1799年のプファルツ-バイエルンの国土は、ティロールとオランダとの間、およびフランスとボヘミアとの間の異なる発展をし、異なる統治をされてきた選帝侯領と領地の集まりであった。数年のうちに東シュヴァーベンにあった80以上のカトリックおよびプロテスタントの領地がバイエルンに移行した。それからプロテスタントの選帝侯領アンスバッハとバイロイト、帝国都市ニュルンベルク、誇り高い領主司教領ヴェルツブルク、バンベルクおよびアイヒシュテットを含むフランケン、帝国貴族領、領主司教領フライジング、パッサウおよびアウグスブルク、少し遅れてダールベルクの侯爵領レーゲンスブルク（1810）、一時的ではあったがティロールとザルツブルク、がバイエルンに移行した。特にフランケンでは最初はミュンヘンの政府と新しい主権について認めようとしなかった。パッサウとザルツブルクは数世紀来、バイエルンよりはハプスブルクのオーストリアに属しているという意識があり、

またシュヴァーベンではレヒ川とイラー川との間で当初はミュンヘンの領主への好意が必ずしも生まれなかった。初期の占領期間における派遣者の思慮に欠けた傷つけるような行動は、教会や修道院のせつかな収奪や破壊および旧来の市参事会の権利を排除することとは別に、抵抗しようとする心を掴むことに貢献しなかった。特に思慮に欠けた聖職者の領地変更は苛酷で傷つけるものと受け取られた。経済に関して大都市への結びつきが活発さや収支に影響すればするほど、これまで多様な文化生活の中心であったヴェルツブルク、バンベルク、アイヒシュテット、パッサウ、フライジング、レーゲンスブルク、アンスバッハ、バイロイト、ケンプテンのような宗教的および世俗的な都はほとんど忘れられた田舎の都市に落ちぶれた。

これらすべての宗教界と世俗、カトリックとプロテスタントの主権に関するさまざまな絡みにおいてモンジュラは新しいバイエルン国家を、歴史的な状況や旧来の権利や伝統をあまり考慮することなく、まったく啓蒙主義者の理性によって作りだした。その偉大な模範は先進国とされたフランスであった。モンジュラが国家を理論と実践で打ち建てるための指導的な考えは国家主権の原理であり、それは外部からは制限されない主権であって、それを超える主人を許すものではなく、内向きの主権としては国家固有の権利であり、"ordre naturel de l'état" であった。君主の絶対主義の代わりに啓蒙主義の精神における国家の絶対主義が登場した<sup>22</sup>。これによって「国家内で固有の権利の力による収奪過程」が始まった<sup>23</sup>。これまで最強の権力は貴族とそれよりも強い教会であった。この二つの権力が旧選帝侯領バイエルンを実質的に動かしてきた。モンジュラは数年のうちに主導する大臣として厳格な中央集権の国家組織を作った。これまで固有の権力を持っていた主権者は力を奪われ、また国の下級官僚はその行為の自由を著しく制限された。近代的な国家を作るには、精力的な手で行わなければならないことを認めなければならない。モンジュラは新しいバイエルン国家の祝福された創造者だけでなく、また古いバイエルンとその生活様式を破壊した侮辱的で悲劇的な像でもあった。

人民、聖職者の大部分、さらに広範囲の旧来の保守的な貴族にとって、これらの最近のモンジュラはあの悪魔のような男、人々が思うには、人の好い無知な国王を自分の路線に乗せて、恥知らずな嘲笑をもって教会や修道院を破壊し、人々が心を寄せている荘厳で敬虔な場所と時間と事物をすべて無意味で有害な迷信として掃き捨てた男のように思われた。「フランスが好きな」大臣に対する嫌悪、憎しみはナポレオンによる抑圧時代に際限なく大きくなった。皇太子ルートヴィヒを先頭とする、広範囲のグループがモンジュラをドイツ的なものへの裏切り者と見なした。モンジュラは無数のビラと匿名の小冊子で、バイエルンではそれまでに例を見ないほど侮辱され攻撃された。ナポレオンの敗北のあと、激しい情熱でもってモンジュラを憎んでいた皇太子に率いられた敵対派が表に現れた。皇太子ルートヴィヒは国王に働きかけて1817年の春、国王がかつては全権を与えていた大臣を解任させた。実際の衝突は憲法問題における違いから生まれた。

## 世俗化<sup>24</sup>

バイエルンの選帝侯マックス IV 世ヨーゼフは1799年に政務に就いた際に、これまでもそうであったように、宣誓を領邦等族の制度に従って行った。彼はその中で厳かに騎士、聖職者および市民の身分のすべての権利と財産を保持すると約束した。その後も彼は繰り返し文書で、あるいは口頭で、修道院自身がやめない限り修道院を廃止しないと、安心させるような保証を与えた。世紀の変わり目における戦争で宗教財団や修道院は広範囲の負担を強いられていた（宿舎、野戦病院、戦争寄金、糧秣）。教会の銀製品の多くが当時溶解された。しかし選帝侯と首相は秘密裡に一般的な世俗化を固く決心した。実行の計画は既にすべて準備されていた。修道院廃止の実行者はゲオルク・フリードリヒ・フォン・ツェントナーであった<sup>25</sup>。1801年選帝侯は最初の修道院の廃止をミュンヘンとランツフートで開始した。首都ミュンヘンでは学校の建物が必要であり、ランツフートではインゴルシュタットから移設する大学の建物が必要であった。いくつかの修道士集団は譲歩したが、気を悪くし、争ったのはミュンヘンのテアティーノ会<sup>26</sup>とノイマルクトのベネディクト会修道院ザンクト・ファイトであった<sup>27</sup>。教会の権利、フライジングの司教や教皇の同意について選帝侯は気に掛けなかった。

賢明にも選帝侯はローマ教皇大使の信任を拒否していた<sup>28</sup>。同じく 1801 年教会の主権に関わる重大な公布が出され、人民に苦い思いをさせ、大いに混乱させたが、それはクリスマスの深夜ミサを夜から朝に移し、また教皇クレメンス XIV 世が認めた祭日の継続を国家として厳しく禁止したことであった。というのはこれまで下級聖職者と、とりわけ人民は世俗および宗教の役所から禁止のお触れが出ていてもまだ頑固に祭日を守っていたからであった。

1801 年バイエルンではまた十字架行列と祈願行列、大規模な巡礼、Heilsgeheimnis を形に表した展示、および多くの人民の礼拝 (volksandacht) を国として禁止した。路傍の聖人の像や拷問の柱、野にある十字架や Wegkapelle は取り払われねばならなかった。その石で疲れた旅人のために石のベンチを設置しなければならなかった！

1801 年から 1804 年まで教会と教会の慣習に関する政府の指示が洪水のように出された。領主司教や選帝侯カール・テオドアの同様の布告と違って、今回は実施が強制され、違反すればきつく罰せられた。遂に「椰子のロバ」は姿を消した。四旬節の間の好まれた「オリーブ山での祈り (Ölbergandacht)」では教会の中廊から主を慰めるために天使が浮かびながら降りてくることも無くなり、聖霊降臨祭で集まった人々の上に丸天井の「聖霊の穴」から、聖霊が鳩の姿で現れることも無くなった。また「キリストの昇天祭」は 1803 年から禁止され、それまでは昇天祭の最初の晩祷の間、3 回吊り上げられる人形によって演じられていた。クリスマス時期の "Kindleinwiegen"、行列の際の Bußsäcke、信心会の Genie と Page、Heiligen Gräber、"Goldene Samstagsandacht"、人と家畜の悪魔払いが禁止され、行列はマルコの日とキリスト昇天祭の前の祈願週間、聖体の祝日およびその次の日曜日に限定された。国外への巡礼だけでなく、長期の巡礼も原則的に禁止となった。

これまで人々の教会暦 - 教会と世俗が半々である - は祭日で賑やかであった。今やそれはピューリタンの理性的なものでなくてはならなかった。しかしこれはバイエルン人々の好みにまったく合わなかった。禁止令にもかかわらず、ミュンヘンの市民は 1802 年になったもまだ古くからの聖なる山アンデックス修道院への巡礼を続けていた。キリスト昇天祭の前の晩にそちらに行き、祭りの日にいろいろなミサやお祈りのためまた戻ってきた。しかし祈りを捧げる巡礼者が従来のように祈りと鐘の鳴り響く中で市内に入ることを防ぐように命令を受けた甲騎兵たちがゼーリングア門のところで待ち受けていた。それには巡礼者とそこへ急いで駆け付けたミュンヘン市民が憤激した。警察署長は地面に投げつけられた。大騒動が始まった。何人かの市民は近隣の教会の鐘の綱を確保した - そして何百年来やってきたように巡礼者は多くのミュンヘン市民に伴われて、大きな祈りの声と鐘の音と揺れ動く旗のもとに市内に入った。これに対して数百人が逮捕され、一晩乗馬学校に留置された<sup>29</sup>。

また 1801 年末に国による修道院廃止がランツフートで始まった。それはゼーリゲントール修道院、聖十字架修道院、ロレット修道院およびドミニカ修道院であった。翌年、この行為は終了した。選帝侯はさまざまに「不満を持たされた」教団の人々が脱退することを承認した。フランシスコ会およびカプチン会修道士は、托鉢修道会の中でも特に嫌われていたが、選帝侯から告解と説教を禁止された。そこでミュンヘンの聖母教会の司教座司教カノニクス・ヨーゼフ・ダルヒンガーがフライジングの領主司教に頼まれて選帝侯に真剣に苦情を述べたが厳しく拒絶された<sup>30</sup>。

司教や聖職者たちは彼らのこれまでの管轄分野への厳しい国家権力の介入に対して抗議の声を上げたが、効き目はなかった。過去数百年とは違って、その言葉はおどおどして、心配げであった。司教たちは既に自分たちが支配した世界は過去となったこと、フランスから始まった革命の波が彼らと教会にやってきたことを知っていた。

最後までバイエルンの住民、特に子供や親戚を教会に預けている上層や中流の上層は、多くの場合扶助も受けていた。しかしこれは規則ではなかった。旧バイエルンの貴族の家系でまったく世俗化の影響を受けないものはなかった。人民の中に最近の事件に当惑と不安が広がった。ただ小さなグループだけに喜びを感じた者がいた。またもや全国の都市、市場、村の代表団がやって来て、最大にへりくだった嘆願書を渡そうと試みた。それは僧侶を存続し、巡礼、野の礼拝堂、崇拜する聖人の絵を保護するためであった。全国に多数の聖なる場所を設置し、あるいは古い修道院を飾り付けたのはそう昔のことではなかった。そして今は至る所で荒廃の残酷さを体験した。バイエルンの役所はこの数年でこれまでになかったほど、忠実で良い人民の心を傷つけた。

人民の苦痛と多くの - 決してすべてではないのだが - 下級役人の無思慮な粗暴に関する報告や伝聞は衝撃的であった。それはたとえば、アイヒアッハ近くのタクサにある *Marienwallfahrt* の完全な荒廃で、かつて神父アブラハム・ア・サンタ・クララが口を極めて賛美したバロックの *Hennenwunder* にはまったく無邪気な信仰の華やかさがあったが、今は石一つすら積まれていない<sup>31</sup>。あるいは司教の町フライジング、ヴェッツブルン、バンベルクのラングハイムでどんなものが意味もなく破壊されたかを考えてみれば分かる。あちらでもこちらでも、聖なるものを破壊させないようにしたい人々の一揆が起こった。選帝侯の政府とインテリ新聞は 1803 年だけで、47 の処罰に値する自治体を非難した。というのは、そこでは大勢の人が集まって、迷信の保護を引き出そうとしたからであった。村人や市民が一緒になって、あるいは荒野の農家が先祖が建てた教会や礼拝堂をただ救うために支払う場合も少なくなかった。衝撃的な報告のひとつは、ライテンハスラッハ近くの巡礼教会マリエンベルクを救うために永年にわたる粘り強い闘いのお話である。そのお蔭でこの教会はザルツアッハ谷の上に素晴らしく美しい姿で今日も建っている<sup>32</sup>。信仰深く勇敢な人民はあの嵐のような日々に英雄と聖域を護り、その記憶を言い伝えや伝説の花輪の中に残したのである。

まだ 1802 年のうちに、バイエルンにあるフランシスコ会とカプチン会の全部の修道院を廃止しただけでなく、靴を履いているかいないかにかかわらず、カルメル会、アウグスティノ会陰修士、アウグスティノ跣足修道士、ドミニコ会、上プファルツの等族身分でない女子修道院や僧院を含めて、ヴァルトザッセンを除き、廃止した。修道士会の会員には僅かな年金が定められ、フランシスコ会とカプチン会、さらにすべての女子修道院の教団員は「中央修道院に - 根絶やしにするため - 集められた。エリザベト病院修道会、イギリスの修道女およびウルスラ会だけは暫定的に看病と女子学生の教育のために存続したが、完全に国の管理下に置かれた。

1803 年には正式に領主司教の司教区本部、司教座聖堂参事会および帝国宗教財団の帝国地位剥奪と世俗化が行われたが、これを同年 2 月 25 日帝国代表团主要決議がバイエルンに対し承認した。既に 1802 年夏に選帝侯はこれらの対象以外にもいくつかを暫定的に軍事占拠していた。この 1803 年にはまた高位聖職者が毅然として権利を防護しようと努めたが、等族身分の宗教財団と修道院が正式に廃止された。ベネディクト会、アウグスティノ司教座聖堂参事会、プレモントレ会、シトー会、アルトミュンスターの *Birgittinen-Doppelkloster* の宗教財団、およびまだバイエルンに残っている宗教財団および修道院が前述の女子の教育および病院教団を除いて廃止された。修道院の居住者は非人道的なほど短期に、しばしば翌日に、修道院を出て行くか、犯罪者のように監視のもと格子柵の付いた車に乗せられて、中央修道院に運ばれた。帝国においてはオーストリアに次いで最大のカトリックの国バイエルンで、思いやりのない、容赦のないやり方で行われた世俗化はバイエルンの歴史において最大の汚点である。1802 年から 1804 年までバイエルンで修道院荒廃の嵐が吹きまわった。後年、つまりレーゲンスブルクがバイエルンに移行した (1810 年) 頃、モンジュラは非常に慎重になっていた。経済的に貧弱な国で大きな資産の売却が一時に過剰に行われたため、売却および競売の価格が著しく下がり、国が期待していた所得に達しなかった。残っている価値の高いものは厳選された工芸品、手書き文書、稀覯本で、値打ちのあるものはミュンヘンに送られた。さらに広大な、売却の難しい教会の森林が残った。教会は原則として地元の教会資産、司牧会および司牧教会の寄付だけを所有できた<sup>33</sup>。ハインリヒ・フォン・トライチケが、当時ドイツの君主は腹の減った蠅の蛆虫のように祖国の出血している傷口に群がり、1803 年の世俗化は帝国法による解決にも関わらず「とてつもない法破り」であったと言ったのは、当を得ている<sup>34</sup>。最もひどい修道院略奪者の一人で、選帝侯の修道院廃止責任者であったクリストフ・フォン・アレティンは当時 (1803 年) 嬉し気に次のように書いている。「今日からバイエルンの歴史でこれまで無かったような重要な時代が始まる .... 哲学的な歴史家は修道院廃止について、ちょうど私闘における自衛権の廃止について書いたように、新しい時代が始まる、と記すだろう。また人々は修道院の廃墟の傍に行くと、まるで古い盗賊の城の廃墟を見ているような、入り混じった感情を抱くことだろう<sup>35</sup>。この考え方の持ち主は 19 世紀初頭に勝ち誇ったように見える。

一般的な世俗化はまた修道院都市や宗教財団および修道院における多くの教会による教育および社会的施設を破壊した。そのうえに修道院廃止によってこれまで所有していた土地を流



通機構に乗せた。確かに修道院の所有地に多くの農民は所有地を拡大し、経済的に有用にすることができた。しかし地域に対する経済的な損害はより大きかった。修道院農場は通常模範的に運営されていた。借地農民は寛大に扱われ、過剰な負担を強いられず、困っているときは常に考慮され、経済的な支援が提供された。裕福な修道院に属さないヴェルテンブルク僧院の例でも、この寛大な措置はすべての修道院に属する人々に対する教会的、社会的責任であることが非常にはっきりしていた<sup>36</sup>。修道院が基本的に分かち合うしっかりした基礎があるからこそ、17世紀後半と18世紀の選帝侯国バイエルンはあらゆる危険な政治的および財政的に破壊をもたらす冒険 - マックス・エマニュエルとカール・アルブレヒトの下でそうだったのだが - に持ちこたえた。つまり上からの破産は下からの幅広い連帯による支えによって緩和され、受け止められた。大小の精神的な中心が無くなるとともに地方の精神的文化的荒廃が始まった。高い建物のこれまでの施設が消えただけではなかった。多くの司教座、宗教財団および修道院の経済的な富と共に、また際立った芸術的、文化的刺激とその開花の可能性も消滅した。それは芸術および音楽の育成において、また多くの地では高度の科学的施設についても、最後まで貢献していたものであった<sup>37</sup>。確かにドイツ文学の古典時代においてカトリックの声は勢いが無い。しかしカトリックの南ドイツ、オーストリア - バイエルン - シュヴァーベン - フランケンの17世紀後半および18世紀における文化の壮大な言語能力は、優勢な対応関係ではないにしても、それと同根ではないだろうか？

ドイツにおける宗教的国家はまさに良い時期に解体された。これが19世紀に生き続けることはほとんど考えられなかった。当時のこのような国家がいかに教会に対して荒廃させるように作用したかは、1870年までに教皇の国家が不名誉な終わり方をした歴史が示している。宗教財団と修道院の廃止はこれとは異なった評価がされるべきである。恐ろしい崩壊にも関わらず、19世紀初頭におけるバイエルンのカトリック教会にはキリスト教的な確信をもって、新しい時代に古い信仰を生かし、ひどく揺がされた教会制度をより純粋で、より純化された、より敬虔に再建することに取り掛かった、立派な宗教的態度に欠けてはいなかったと信じることができる。

## 世俗化と政教和約との間のバイエルンの司教区

古くの、あらゆる被害にも関わらず依然として強力に豪奢であった帝国教会と、帝国直轄剥奪および世俗化後のみずぼらしい地位との強い対比をヨーゼフ・ゲレスは次のように短い言葉で的確に表現している。「豊かに刺繍された緋色の衣の代わりにびったりしたバックラムの法衣、失われた君主の王笏の代わりに葦の茎、さらに恭順の茨の冠：ecce ecclesia germanica (見よドイツの教会を)」<sup>38</sup>。

帝国代表団主要決議とウィーン会議(1815年)までの領土の移動によって、ドイツではカトリック教徒がプロテスタントの主権のもとに押し込まれることがその逆よりもずっと多く起こった。その結果カトリック教会の外観がひどく傷み、危険な状態になった。

何よりも交渉においてマインツ選帝侯 - 大司教の代理人およびコンスタンツの領主司教であるカール・テオドア・フォン・ダールベルクは少なくともドイツの教会制度を維持し、「ドイツの教会」の存続のためにまだ救えるものは救おうと努力した。全般的な世俗化からは - 数年だけであったが - 3つの帝国の宗教的等族が免れていた。それはドイツ騎士団、マルタ騎士団および新しく創られた選帝侯大司教ダールベルクの国であった<sup>39</sup>。帝国決議の第25項はドイツの選帝侯、大司教、首都大司教および首席大司教の位階はマインツの座に統一されること、またこの座は - マインツの座は1801年からフランスの司教区であったので - レーゲンスブルクの司教座教会に移管されること、を決めていた。新しい選帝侯大司教国の領土はレーゲンスブルク侯国領、アッシャフェンブルク侯国領および伯爵領ヴェッツラーから構成された。

ダールベルクの努力によって帝国決議で重要な第62項が成立した。これはドイツの教会が所有物を失ったあと教会制度を確保するというものである。つまり大司教区および司教区は、

帝国法に基づく別の司教区が成立してそれに将来の司教座聖堂参事会の開設も従うようになるまで、従来の状態で残るというものであった。

第 63 項によれば、「各国におけるこれまでの宗教行為」は「あらゆる種類の廃止と侮辱」とから守られねばならず、「特にどの宗教にとっても固有の教会資産の所有とそれを妨げられずに享受することがウェストファリア和約の規定に従って温存されねばならない。」しかし君主は他の宗教的親族を容認し、それに完全な市民権を認めても構わない。

やがてドイツの教会制度は 1000 年以上も所有と密接につながっており、宗教部分を世俗部分から突然分離することは成功しないことが明らかとなった。加えて上述の君主から教会を法的に守るということが一般に無視された。1806 年に帝国が完全に解体すると教会は最後の守護者を失い、それぞれの君主の恣意にゆだねられることになった。ドイツの司教座は空席となり、差し当たり埋められることはなかった。多くの司教区は（コンスタンツ、ヴォルムス、キムゼーおよびコルヴァイ）の管轄となり、その他は 10 年後にようやく再び司教を得た。国に完全に引き渡された助任司祭あるいは教皇の助任司祭の職務は司教区管理者が行った。その際に司法権管区は全ドイツのほどこでも例のないほど恣意的に君主に分配あるいは割譲されたが、それはできるだけ領土の境界と教会の教区を一致させるためであった。教皇座との交流 - はほぼ完全に停止した。というのは領主はこのような結びつきを一般に厳しく禁じたからであった。ナポレオンによる教皇の締め付けの結果、教皇は何年も訪問されなかった。このようなもつれた関係から教会の権利の不安定さが増加した。周知の教会の苦境の中を生き延びた司教や司教区事務局は何年もの完全な自立を経験していた。

## ザルツブルクとキムゼー 40

1000 年もの間、旧バイエルンの司教区はザルツブルクの教会管区に属していた。パッサウだけが 18 世紀にザルツブルクの激しい抵抗のもとで、免属を押し通すことができた。レーゲンスブルクの同様の試みは旧帝国でもう目的を達成しなかった。今や旧秩序は崩壊した。ザルツブルクの帝国領主として最後に統治した大司教は帝国伯爵ヒエロニムス・フォン・コロレドで、1772 年から大司教区を率いていた。フランス軍が押し寄せてきたので 1800 年に彼はブルーノに逃れ、それからウイーンに行った。1803 年彼は世俗的な統治を断念しなければならなかった。当時ウイーンの宮廷はオーストリア内部の司教区の調整を繰り返していた。ウイーン的首都住民の利益となるようにザルツブルク教会から大司教の地位を取ろうという計画が永年あった。コロレドの粘り強い抵抗がそれを妨げていたように思われる。まず 1803 年に大宗教財団ザルツブルクは世俗的な選帝侯領として統治者皇帝フランツの兄弟のフェルディナント：フォン・トスカナ大公に与えられた。1805 年彼は公国をヴェルツブルクと引き換えにオーストリアに割譲しなければならなかった。1806 年から 1809 年までザルツブルクはバイエルン王国に属した。その後、この都市はザルツブルク領の大部分と共に最終的にオーストリアに帰属した。

大司教区の宗教的な統治はコロレドが旅立ってからキムゼーの領主司教であるツァイルおよびトラウホブルク伯爵であるジグムント・クリストフが率いていた。1807 年 11 月バイエルン国王は彼に、彼の司教区キムゼーの高位聖職者の権力をフライジングの司教総代理に割譲するよう要求した。半年以上もキムゼーの領主司教の粘り強い抵抗が続いた。ナポレオンと結びついたミュンヘンの強い圧力と、ナポレオンにひどく辱められたウイーンの宮廷の圧力のもと、同様に圧力をかけられたザルツブルクの大司教の指示もあって、1808 年 6 月 16 日に彼は要求された文書に署名した。これによってキムゼー司教区はフライジング助任司祭の下に入った。これで彼に終わりが訪れた。最後のキムゼー領主司教は、フライジングの主がこの分配に力を入れたのではなく、むしろ旧い司教区制度の変更に対して反対していたことがよく分っていた。ここでもう一度キムゼーの司教は没落する帝国における称号で署名した。それは神の恩恵を受けた司教および神聖ローマ帝国のキムゼー領主、帝国大膳長官、ツァイル・トラウホブルク伯爵、ケルン大司教本部および司教本部、ザルツブルクおよびコンスタンツの司教座教会参事会員ジグムント・クリストフであった。

領主司教コロレドの懇願に応じて皇帝フランツはジグムント・クリストフを大司教区ザルツブルクの司教補佐に任命した。1809 年の戦争の成り行きとそれに続くナポレオンによる教皇

の拘束のため、教皇による認証はもはや得ることが出来なかった。ザルツブルクが1809年にバイエルンに与えられたとき、国王マックス・ヨーゼフは管理人のジグムント・クリストフに非常に好意的であった。一時は彼をミュンヘンにおけるバイエルンの地区大司教にする考えもあった。この計画は実行されなかった。1812年5月20日領主司教コロレドはウィーンで死去し、シュテファン聖堂に埋葬された。

国王の認可によってジグムント・クリストフはザルツブルク大司教区の宗教的な仕事を継続して率いた。その法的根拠として死んだ大司教の明確に遺志があったが、加えて時勢が違えばとくに教皇が彼に認証を与えているはずであった。このような前提のもとに”salva ratificatione Sedis Apostolicae”にも拘わらず、大司教区はその機能を維持していた。最後のキムゼーの領主司教は1814年11月7日ザルツブルクで死んだ。彼はバイエルンの国費でこのセバスチアン教会の墓地の、200年前に領主司教ヴォルフ・ディートリヒ・フォンライテナウが建てさせた霊廟の入り口に埋葬された。大司教区ザルツブルクはラヴァントの領主司教フィルミアン伯爵レオポルト・マキシミアンが管理者として率いた。1816年皇帝フランツは彼を大司教に任命したがローマは継続して管理者としてのみ認定した。

1817年のバイエルンの政教和約によって小さな司教区キムゼーは公式に廃止された。その小さなバイエルンの部分は新しいミュンヘンとフライジングの司教区に帰属し、南の大きな部分のティロールの教区ザンクト・ヨハンは大司教区ザルツブルクに帰属した。ヘレンキムゼーにあり、聖ズイクストゥスとセバスチアンを祀っていた宗教財団および聖堂教会は世俗化の流れの中でとくに売却されていた。最後の司教がバイエルン国王に宛てて書いた多数の手紙の中で、かつての「美しい司教座聖堂教会」が面目を失わされていることに対する嘆きが述べられている。1808年双方の塔が略奪されて「全く外観が損ねられ、根こそぎ持って行かれ、辱められた」とキムゼーの最後の助祭が苦々しくフライジングに宛てて報告した<sup>41</sup>。教会は長い間醸造所として使われ、今日もなおこの荒れ果てたバイエルンの聖堂は当時の悲しい記念碑として建っている。

## フライジング<sup>42</sup>

フライジングとレーゲンスブルクの司教区、それにベルヒテスガーデンの司教座教会管区は旧帝国の終わりごろ愛すべき高位聖職者の領主司祭、ヨーゼフ・コンラート・フォン・シュロップフェンベルク男爵が率いていた。彼自身陽気な性格であったが、3つの宗教財団をきちんと無駄なく管理をし、十分でまた何よりも几帳面に俸給と年金を支払い、場合によっては前払いもした。彼は常に臣下、特にベルヒテスガーデンの人々を心から愛した卓越した宗教的君主であった。この税金の重荷を回避し、苦境にある人を助けた男が丁寧に手入れされたロココの鬘をつけ、黒い絹の帽子を被ってよく散歩をし、誰とでも友好的に会話をした男の姿は住民の心に強い印象を与えた。

迫り来る世俗化に対してこの領主司教シュロップフェンベルクは教会の側の最も強力な守護者であった。レーゲンスブルクから彼は、望んだ結果は生まなかったものの、宗教者の帝国身分のため力を合わせて行動した。

1802年にバイエルン政府が教会に敵対的な傾向を明らかにし始めたとき、また多くの修道院が既に帝国決議以前に廃止されたとき、シュロップフェンベルクは何度も選帝侯に抗議した。彼はまた1802年春に教皇に詳細を報告した。それは純粋な道徳性と精緻な精神という口実で修道院が廃止され、これがすべて司祭に前もって知らされずに行われている、というものであった。

この法に基づいて考える旧秩序の領主は、多くの同時代の人と同様に、もはや新しい権力との関係と持続的な権利侵害に耐えられなかった。1802年6月26日彼は永久にレーゲンスブルクを離れた。彼は、身も心も折れて、孤独のうちにベルヒテスガーデンに急ぎ、そこで死んだ。帝国代表団主要決議はこの宗教財団に3人の統治者を割り当てた。ベルヒテスガーデンはトスカナ大公フェルディナントが新しいザルツブルクの選帝侯として獲得した。15平方マイルの土地と30,000人の住民を持つ大司教区フライジングはバイエルンに帰属し、6平方

マイルと 11,000 人のレーゲンスブルクは選帝尚書長官ダールベルクの持参金として割り当てられた。ダールベルクはその領主司教に可能な限り面倒を見、彼が活着している間は司教領レーゲンスブルクの教会の管理に関わることを控えた。

シュロップフェンベルクは旧秩序の崩壊から数週間しか生きていなかった。1803 年 4 月 4 日彼はベルヒテスガーデンで死に、その司教座教会に埋葬された。彼の墓は右の側廊にある。1803 年から 1821 年、フライジングの最後の領主司教の死からミュンヘンとフライジングの最初の司教が就任するまで、聖コルビニアンの椅子は空席のままであった。当時の司教領フライジングの殊の外厳しい状況は三つの条件にあった。すなわち、一つは長い司教座空席期間である。二つ目は 1816 年以前にこのような大きく、異なった裁判管轄権を引き受ける第二のバイエルンの司教区が無かったことである（ザルツブルク、キムゼーおよびパッサウ地区）。三つ目はこのような保護なく国家の恣意に委ねられた司教区は他になかったことである。

バイエルンの司教都市の中で平和な宗教都市フライジングほど世俗化の嵐がこれほど情け容赦なく破壊的に襲ったところはなかった。それまで領主の宮廷には多数の教会、宗教財団、修道院を有する一つの司教本部と司教区の宗教的および世俗的行政役人が大勢おり、評価の高いギムナジウムや女子高等学校が有名であった。1802 年 8 月 23 日バイエルン政府が軍事的に占拠し、1 か月後に選帝侯領バイエルンの長官ヨハン・アダム・フォン・アレティン男爵が行政的に掌握するためにやってきて、この都市は突然に惨めな終わりを迎えた。フライジング近くのザンクト・ファイトにある Kollegiatstift の司教座教会登記係長ヨゼフ・ヴィショイは冷静な言葉でその日記にフライジングの教会が地に汚され、荒らされたその数か月間の出来事をすべて記している。ザンクト・ファイトとザンクト・アンドレアスの素晴らしい教会は大急ぎで壊され、多くの礼拝堂も同様に壊された。ヴァイエンシュテファン修道院教会も同様に取り壊された。教会の設備は選帝侯バイエルンの長官が 1803 年競売に掛け、ドームベルクにあるペータースカペレにある司祭エルシャンバール（836-854）の墓は開かれて、骨は - 「そこには特に興味を引くものはなかった」 - ザンクト・ヨハン・バプティストの首席司祭が夜に大聖堂に移した。1803 年 5 月 22 日バイエルンの役人が夕方 6 時半にフランシスコ会に修道院の解散命令を出した。その夜の零時 15 分に僧たちは「扉を閉めてミサを行った」。それから同夜、明け方 3 時と 4 時の間に点呼を取った役人がそれぞれに 1 グルデン 30 クロイツァーを手押し付けたあと、フランシスコ会員は中央修道院に移送された<sup>43</sup>。

フライジングの大聖堂は 1803 年 4 月にバイエルン政府によって閉鎖され、助任司祭の懇願によって翌年から年に 1、2 回補助司祭ヴォルフがレーゲンスブルクから堅信あるいは奉獻のためやって来たときに 1 日だけ開かれた。フライジングの高等学校は閉鎖された。こうしてかつては友好的で開かれた都市に長い冬が始まった。

司祭の席が新たに埋まるまで、空席となった司教区を教会の権利に従って率いる参事会助任司祭を選ぶことはバイエルン政府によって禁じられていた。というのは司教座聖堂参事会は解散したことになっていたからであった。従って異常な状況のもとで、領主司教シュロップフェンベルクの死後 10 日目に担当の首都大司教かつ領主司教のザルツブルクのコロレドはフライジングの司教区評議会が一般および参事会助任司祭の職を務めることを承認した。この権限は「司祭の席が再び埋まるか何かその他の方法で提供されるかするまで」与えられた<sup>44</sup>。長い間行われた教会の慣行によればドイツでは司教区評議会が司教総代理または参事会助任司祭を配置することはまったく問題なかった。こうして困難の状況のもとでフライジングの少数の助任司祭委員会が司祭の仕事を続けた。まる 18 年もの間、常に政府に後見され、鋭い目で監視され、また多くの教会の仲間たちから敵視されることも稀ではなかった。聖職者の委員会、司教区管理の中心となったのはヨーゼフ・ヘッケンシュターラー博士であった。彼は大学教育を受け、どの観点からも優れた僧であったが、ひどく打ち砕かれて沈みそうな教会という船を、この厳しい時代の多くの誇り高い高位聖職者のように見捨てることはしなかった。彼は司教区の管理を、国の法律がそれについて可能であることを保証している限り、教会の権利と慣習に従って行った。

当時の議会の議事録によれば、フライジングの司教総代理は大臣モンジュラの政府の言いなりになる道具では決してなかったことが明白に証明されている。

すべての重要な点、例えば小教区の職、司教区の組織、聖職者や人民の宗教的、慣習的生活の監督などにおいて、その際に再々政府の乱暴な叱責を受け入れなければならなかったにしても、高位聖職者の権利を行使し、防御した。教会として疑問のあるときは再三古くからの上位者、ザルツブルクの司教やその枢機卿会議に問い合わせた。

1808年国王の命により、東の広い地域が暫定的にフライジングの裁判管轄区域に入った。それは全キムゼー司教区、さらにバイエルンのもとにあるザルツブルクの教区であった。既に述べたように、フライジングの聖職者委員会はこの付与を決して望んでいなかった。というのはそれはただ重荷と混乱を意味していたからであった。国の圧力のもとに、この司祭の裁判管轄の移譲は教会法上異論がない形で行われた。ザルツブルクとキムゼーの増加分は109の司教区と130,000人の信者であった<sup>45</sup>。このときから国の命による司教区の南東国境への付加と分割が止むことがなかった。多くの混乱が生じた。フライジングで監督を維持することは難しくなった。

バイエルンでは既に1803年に教皇と特別政教和約を結ぼうと努力しており、それに加えて名義司祭カリミール・フォン・ヘフェリン男爵をバイエルンの公使としてローマに派遣していた。彼はあまりにも適応力のある掴かみどころのない性格で、さらにガリア主義—フェブロニウス主義的教会政策の明確な代表者であった<sup>46</sup>。バイエルン政府の望みの背後には、国家教会主権を閉じた地域の教会で拡張し、帝国政教和約に関する皇帝とダルムシュタット司教のあらゆる計画を妨害するという意図があった。しかしバイエルンの政教和約は実現しなかった。またレーゲンスブルクでの1806/07年の再交渉でも実現しなかった。バイエルン政府の勧めに従って、それにピウスVII世の委任を受けて、以前いた教皇大使アンニバレ・デラ・ジェンガが再びドイツに来た。急いで政教和約を結びたいという望みは1806年バイエルン政府の信心が厚くなったのではなく、ただ冷静な国家の理由から出ていた。1806年1月1日からバイエルンは王国に昇格した。それでミュンヘン政府は、新しい国王を教会で浄め、戴冠させることに非常に関心を持った。新しい国王の尊厳を—さらにそれに加えてナポレオンのお蔭であることも—古くからの荘厳な教会の儀式にはめ込み、このようにして国民の意識に深く根付かせる意図があった。

教会での戴冠儀式について出来るだけ早く地域の司教を首都ミュンヘンに置くことが望まれた。候補者として名前が挙がったのは革命軍により追放されていたトリーアの選帝司教クレメンス・ヴェンツェスラウス・フォン・ザクセンであった。彼は今はほとんどアウグスブルクに住んでおり、さらに最後のキムゼーの領主司教でもあった。また長い交渉を行ったが結局レーゲンスブルクでバイエルンの政教和約が成立しなかった。政教和約が実際に締結されたあと(1817年)、イタリアの名義司教セラ・カッサーノが1818年教皇大使としてミュンヘンにやってきました。やがてフライジングの司教総代理を厳しく批判した。この問責は、ドイツの事情を知らず、また過去の負担を負わなかった人々によるものであった。教皇大使は、領主司教シュロップフェンベルクの死後助任司祭のすべての裁判権行使は教会として無効であると主張した。ヘッケンシュターラーは自分自身と尊厳と男らしい決断を持つ彼の忠実な仲間を弁護した。1819年1月30日以降、彼は教皇から教皇助任司祭に任命され、これによって彼は新しい司教が決まるまで新しくなった大司教領を統括した。1821年万聖節の日に教皇大使セラ・カッサーノは国王から指名された最初のミュンヘンおよびフライジングの司教ロータール・アンセルム・フォン・ゲプザッテルにミュンヘンのミヒャエル教会で司教のお清めを与えた。5日後ゲプザッテルは荘厳に大司教の座に就いた。これでもってフライジングの助任司祭であり教皇助任司祭であるヘッケンシュターラーの多大の苦勞を伴った勤務期間が待ち望んだ終わりを迎えた。

前の助任司祭委員会、尊厳と能力のある僧全員が例外なく新たに設立されたバイエルンの司教座聖堂参事会に迎えられた。少し遅れた認証であったが、その教会と王国への忠実な働きに対してヘッケンシュターラーは国王から新しい首都参事会の聖堂参事会会長に指名された。ヘッケンシュターラーは1822年市民功勞勲章を受け、それによって一代の貴族となったが、死ぬまでかつての司教都市フライジングに恩義を感じていた。彼の生涯における多大の苦勞と戦いののち、彼の仕事が無駄ではなかったこと、また旧い信仰と旧い教会に新しい力を与えたことをこの世を去る際に確認できたのは幸せであった。1832年11月7日の夜彼はミュンヘンで死んだ<sup>47</sup>。

ヘッケンシュターラーはまた古い領主司教領フライジングと新しい、まったく違う種類の首都ミュンヘンとを結ぶ橋を作った。1824年ヨハン・ミヒャエル・ザイラーは聖堂参事会会長ヘッケンシュターラーにしみじみも書いている。「貴方は困難な時期においてフライジングという小舟を天のご加護のもとに嵐と洪水の中を幸運にも切り抜けさせました。このことを主は貴方に報いられるでしょう」<sup>48</sup>。

## レーゲンスブルク<sup>49</sup>

1803年フライジングの領主司教ヨーゼフ・コンラート・フォン・シュロップフェンベルクの死はまたレーゲンスブルクの最後の領主司教の死でもあった。しかしレーゲンスブルクの事情はフライジングと基本的に異なっていた。帝国代表团主要決議によって、このなおも「持続する帝国議会」の都市は選帝侯大司教ダールベルクの新しい所在地と決められた。同様に首都裁判管轄権が将来ライン川右岸のかつてのマインツ、トリーアおよびケルンのすべての教会管区、ただしプロイセンの国々は除く、とさらにザルツブルクがプファルツ・バイエルンに拡張している限りかつてのザルツブルクの教会管区にも拡張することが、帝国法によってのみであるが、決められた。

特にバイエルン政府はシュロップフェンベルクの死後ダールベルクがレーゲンスブルクの司教として教皇から認定されることを妨害した。バイエルンはダールベルクの宗主国レーゲンスブルク当初から目の上のたん瘤と感じており、したがってダールベルクが政治、教会分野で地位を強化することにあらゆる努力を払って反対した。

ダールベルクは1803年6月15日に教皇から司教領レーゲンスブルクの暫定的な管理者に任命された。1805年2月1日の枢機卿会議においてようやくマインツの座が教会法上でレーゲンスブルクに移され、ダールベルクは教会法的にライン川のマインツ右岸の旧マインツ教区と小さな侯国レーゲンスブルクに対する大司教に昇格した。司教領レーゲンスブルクの不釣り合いに大きなバイエルンの部分に対して彼はまた管理者としてのみ認定され、死ぬまでその地位にあった。

首都参事会がレーゲンスブルクに作られることはなかった。旧マインツ聖堂参事会がアシャッフエンブルクに存在し、そこからライン川右岸に残っているマインツ地区の管理を行った。レーゲンスブルクにはこれまでの聖堂参事会が混乱の中で新しい教会組織ができるまで細々と仕事をしていた。レーゲンスブルクの人々は疑問の残る昇格を高く評価せず、大司教と認めることをなるべく避けた。ダールベルク自身は、「大司教の枢機卿会議」のタイトルを彼の世俗的な統治の公的な文書にだけ使い、バイエルンの方に公布する文書には使わないように指示した。

ダールベルクは彼のすべての領地で - 宗派に関係なく - 保護を与える賢明で進歩的な君主として振る舞った。また自分で潰れない限り、領地で修道院を廃止しなかった。従ってレーゲンスブルクにおける世俗化はダールベルクの侯国が1810年にバイエルン王国になってからようやく行われた。しかしバイエルン政府は過去の盲目的な嵐の頃よりはずっと用心深くなっていた。

ダールベルクは大司教かつドイツのトップとしてドイツの教会を救い、新しい組織を作ろうと絶えず努力した。彼はカトリック教会が1803年に大規模に略奪されたあと多数の地区教会に分割され、それから保護を受けることなく大抵はプロテスタントの君主に引き渡されることを最大の危険と考えていた。それ故に彼は一人の主席大司教または大司教の下に「ドイツの国家教会」で大きな連合を作ろうとした。その際に教皇にはこれまでのすべての権利を残すことにしていた。「ローマを排除した」国家教会はダールベルクもコンスタンツの司教総代理ヴェッセンベルクも考えていなかった。

ドイツのカトリック教会を維持し、カトリック信者を効果的に保護するために、ダールベルクはまた教会の新しい組織の計画を進めた。帝国がまだ存在する限り、彼は帝国との政教和約に、続いてライン連邦の国々のための政教和約に、ナポレオン支配の崩壊後は全ドイツ連合のための政教和約に領主司教として先頭に立って努力した。しかしこれらの計画はすべて政治的事情とまたダールベルクに対する教皇の不信とによって失敗した。特にバイエルン政

府とその怪しげな教皇への大使カシミール・フォン・ヘフェリン男爵はあらゆる方法でダールベルクに対する疑念を煽った。

疑いもなくダールベルクは善意はあったが政治的に重大な失敗をした。それは多くの偉大な同時代人 - まずはゲーテを思い浮かべるのだが - のようにナポレオンの情け容赦のない天才的な姿に感銘し、心を奪われたのだった。ダールベルクはコルシカ生まれの征服者が彼をただ道具として利用し、再三欺いたことを認めようとはしなかった。ナポレオンの幸運の星と共に、領主司教ダールベルクの世俗的財産はすべて無くなった。1814年彼はレーゲンスブルクに帰り、それからは長い間そこを出なかった。その後はまったく宗教的な課題にだけ献身した。借家の司教座会員の屋敷でダールベルクは熱心に司教の仕事をし、ほとんど貧乏を思わせるようなつましきで、誰にでも好意的で親切に、静かな晩年を過ごした。生臭い環境に適応しなかったこの高貴な男はここに魂の平和を見出した。1817年2月10日彼はここで死んだ。彼の甥は彼のために聖堂に記念碑を建てさせた。これは北側の側廊の薄暗いくぼみに建てられた。1837年コンスタンツ司教領でダールベルクの司教総代理で補佐であったイグナス・ハインリヒ・フォン・ヴェッセンベルク男爵がレーゲンスブルクを訪れた。彼は聖堂の中の記念碑を懸命に探したが、見つけれなかった。最後に寺男が彼を辺鄙な隅っこに案内した。このことをヴェッセンベルクは手書きの回想録にだけ記している。彼の恩人であり、友であった人の墓で感じたことを彼は黙っていた。

ダールベルクの死後、レーゲンスブルク司教区の宗教に関する管理は、司教座聖堂参事会、聖職者枢機卿会議およびその長の補佐司教で聖堂首席司祭のヨハン・ネポムク・フォン・ヴォルフ男爵によって引き続き秩序立って行われた。この国家に常に従順な、しかし教会のために骨身惜しまず働く男を国王マックス I 世ヨーゼフは 1817年にレーゲンスブルクの司教に任命した。旧帝国都市の大司教の地位は政教和約によってふたたび排除された。1822年1月1日司教ヴォルフは司教領レーゲンスブルクの新しい職に就いた。

## パッサウ 50

司教領パッサウは、司教レオポルト・フォン・トゥーン (1796-1826) が古いものの破壊から新しい教会の秩序を再建するまでの全期間を生き延びたという幸運に恵まれた。バイエルン王国では司教領アイヒシュテットだけがこの有利な状態に恵まれた。しかしアイヒシュテットをパッサウとの間にはなんとという違いがあったことか！ アイヒシュテットの領主司教ヨーゼフ・フォン・シュトゥーベンベルク伯爵は優れた知的才能を持たなかった。しかし彼はずっとアイヒシュテットに留まり、賢明な助言者の力を借りて当時の困難の中で司教領をなんとか無事に治めた。一方レオポルト・フォン・トゥーンは善意のある、誠実な人柄の高位聖職者で、1803年の世俗化の年にはもう深く傷ついた帝国領主として彼の司教領を去り、翌年数週間「私的に」戻っただけであった。彼は死ぬまで司教領パッサウに足を踏み入れることはなく、広々としたボヘミアの所有領で過ごした。彼は司教領のことをいつも気にかけていた。定期的に報告させ、重要な決定事項は手元に残しておいた。しかし不在が長く続いたので、全司教領の分解の重大な兆しや実情をもはや見渡せなくなった。司教領管理のために彼自身が任命した人々に対する不信が募り、ためにする多くの中傷者が入り込んできた。問題の主原因は以前の聖職者委員会副議長マツトホイス・ゲルハルディンガー博士と聖職者委員で後の司教座首席判事のペーター・ヘルマイヤーであった。1817/18年の教会の新秩序をきっかけに、全司教区を分断し混乱させる重大な衝突が起こった。旧領主司教はもはや帰還する元気が起こらなかった。

1818年まで必要とされる司教の機能を補佐司教のカール・カイェタン・フォン・ガイスルック伯爵が務めた。そのために彼の司教区である上オーストリアのカルハムから年に数回パッサウにやってきた。オーストリアの皇帝フランツが彼をミラノの大司教に任命したとき、パッサウの候補者は任命式をレーゲンスブルク、アイヒシュテットおよびミュンヘンで受けなければならなかった。1818年から補佐司教アダルベール・フォン・ペヒマン男爵が任命されるまで (1824年) 司教区パッサウで司教の任命式は行われなかった。人々は子供に堅信を授けてもらうために隣の司教区まで 10 時間から 15 時間歩かねばならなかった。

後任の司教カール・ヨーゼフ・フォン・リッカポーナ、彼はザイラーの弟子である、がようやく司教領パッサウの秩序をふたたび取り戻すことができた<sup>51</sup>。1826年領主司教トゥーンの死の直後にヨハン・ミヒャエル・ザイラーは「シュパイアーに次いで司教区パッサウは最も放置されている」と深い懸念を示している<sup>52</sup>。最後の領主司教が司教の冠の上に領主の帽子を被り、司教区を困難と危険の時間の中に放置したことを誰しも強く非難せずにはいられなかったろう。

## フランケンの司教区バンベルク、アイヒシュテット、ヴェルツブルク<sup>53</sup>

ナポレオン時代の絶え間の無い領地の変更の際に、バイエルンはティロールとザルツブルクを獲得できなかったが、フランケン、東シュヴァーベン、さらにウイーン会議での交渉の成果として新しくできたライン川左岸のプファルツに相当の領地を獲得できた。バイエルン王国による統治でフランケンはある程度の影響を受けていたものの、フランケン地域の旧司教本部では、誇り高いフランケン貴族のもと、長い間バイエルン支配をひどく嫌っていた。

1802/1803年に司教本部バンベルク<sup>54</sup>が選帝侯領バイエルンに移行したとき、面積は約65平方マイル、住民は150,000から195,000人であった。正確な国勢調査は行われなかったし、多くの地方で紛争が起こっているという政治情勢であった。プロイセンの影響のもとに1795年年老いて弱っている上に、精神的に大したことの無い老人クリストフ・フォン・ブゼック男爵(1795-1805)が領主司教に格上げされた。彼に転覆計画への抵抗を期待できなかった。老人の軽度の知的障害が進行した結果、1800年に小柄だが精力的なヴェルツブルクの領主司教ゲオルク・カール・フォン・フェヒエンバッハ男爵が司教補佐に選ばれた。その他のバイエルンの地と動揺に、バンベルクでも司教座聖堂参事会とすべての宗教団体および修道院が廃止され、司教都市自体でも司教座聖堂参事会と並んで3つの修道院(Kollegiatstift)、つまりミヒェルスベルク僧院および聖グループと聖クララの2つの尼僧院が廃止された。領主司教の大学は高等学校(Lyzeum)に格下げされた。バンベルクとヴェルツブルクの最後の領主司教としてゲオルク・カール・フォン・フェヒエンバッハは1808年に死に、司教領は10年間主がいなくなった。管理は「司教総代理」が面倒を見た。その長を解体された聖堂参事会の有能な2人の男ヨーゼフ・ゲオルク・フォン・フッテン男爵(1812年まで)とトッカウ管区のアダム・フリードリヒ・フォン・グロース(1821年まで)が務めた。

バイエルン王国で教会の新秩序が作られた際に、これまでアイヒシュテットの領主司教であったヨーゼフ・フォン・シュトゥーベンベルク伯爵<sup>55</sup>がバンベルクの最初の大司教に任命された。彼の兄弟の補佐司教フェリックス・フォン・シュトゥーベンベルクと有能な役人オイヒャリウス・アダムおよびその他の聖職者参事会員に助けられて、多くの面倒な事情にも関わらず賢明にまたしっかりと治め、時には国の干渉に抗議の声を上げた。1818年教皇が彼をバンベルクの大司教に公認し、1821年に彼がこの職に就いたとき、既に高齢のため腰が曲がっていた。彼の望みに従ってその後も管理者として司教領アイヒシュテットの事実上の統治者に留まった。彼はまたアイヒシュテットのレジデンツに住まいを保有していたが、新しい大司教区バンベルクの秩序だった管理も行った。大司教シュトゥーベンベルクは1824年アイヒシュテットで死んだ。

司教区本部バンベルクと同様にヴェルツブルク<sup>56</sup>もシェーンブルン家出身の偉大な領主司教のもとに際立った開花期を経験し、それはなお18世紀の終わりまで余韻を残していた。最後の領主司教ゲオルク・カール・フォン・フェヒエンバッハ男爵(1795-1808)は1796年にフランス革命軍の破壊的な侵入を、また1802/03年にプファルツ-バイエルンに移行したときに司教区本部の世俗化を経験した。拡大した司教区本部は面積約95平方マイル、住民約300,000人であり、54の管区に分かれていた。司教は背が低かった。住民は聖堂首席司祭としての彼を「チビのフェヒエンバッハ」と呼んでいた。しかし彼は精力的であった。プファルツ-バイエルン軍が占領のために侵入してきたとき、彼は怒って言った。「これが選帝侯領プファルツの軍隊だけなら司教区本部軍の先頭に立ってここから追い出してやりたい」。1803年ヴェ



ルツブルクの宗教財団と修道院は廃止された。1806年にかつての司教区本部はハプスブルクの大公フェルディナント・フォン・トスカナの穏健な支配のもとに入ったが、1814年最終的にバイエルン王国になった。

領主司教のヴェルツブルク大学は宗派差別のない大学に代わったが、存続した。領主司教フェヒェンバッハは世俗化の後も司教としての職を続けたが、遠慮してヴェルンエック城に隠遁していた。彼は真面目にまた大司教ダールベルクと協力して、この非常時においてバイエルンとドイツの司教団の団結のために努力した。フェヒェンバッハに文書を書き、司教領ヴェルツブルク統治に心身を捧げたのは教養の高い助任司祭で本部長のグレゴール・ツィルケル博士<sup>57</sup>であった。それまで司教区制主義者であり、イマニュエル・カントの崇拝者であった彼は、1802年以降急速に厳格な教会の規則による聖職者で司教に変身した。グレゴール・ツィルケルは死ぬまで（1817年）司教区ヴェルツブルクを率いた。国家教会主権に対する彼の闘いによってまたカトリック学識者協会の設立によって、彼は19世紀における「カトリック運動」の開拓者であり、先導者であった。

## アウグスブルク<sup>58</sup>

アウグスブルクの司教の裁判管轄権は以前からの任務として常にバイエルンの移住地域および国家地域に及んでいた。19世紀の最初の20年間における領地の変更によってレヒ川とイラー側との間の全域がバイエルンに帰属した。

世俗化の際に分散したアウグスブルク司教本部は約54平方マイルの土地とほぼ100,000人の住民を抱えていた。当時この司教領は領主司教クレメンス・ヴェンツェスラウス・フォン・ザクセン（1768-1812）が治めていたが、彼は同時に最後のトーリアの選帝侯大司教でもあった<sup>59</sup>。革命軍がやってきたので彼は1794年にアウグスブルクに逃げた。アルゴイのオーバードルフ城（マルクトオーバードルフ）が好きで、そこに住み、1812年7月12日そこで死んだ。1806/07年の政教和約交渉の際に彼がその地位を熱望していたミュンヘンの大司教および枢機卿に昇格することが考えられた。このザクセンの王子は善人で、臣民の福祉を常に気にかけていた君主であり、極端を嫌い、穏健な司教制の代表者であり、適度のカトリック啓蒙主義者であった。多くの点で彼はダールベルクに似ていたが、明らかに強い性格には属していなかった。

司教領アウグスブルクでも世俗化が行われた。その司教座聖堂参事会のもとに40の参事会員職と、41のその他の教会禄受領者、9つの同職団体、25の高位聖職者修道院、（僧院および管区、その下に多数の帝国宗教団体）、34の托鉢修道会の修道院、2つの女子宗教財団と28の女子修道院があった。

領主司教ヴェンツェスラウスが1812年に死んだとき、バイエルンとヴェルテンベルク政府の干渉が強くなった。ヴェルテンベルク国王は1813年79の教区の割譲を命令し、エルヴァンゲンに独自の司教総代理職を作った。翌年、ティロールにある12の教区がブリクセンの司教のもとに置かれた。国王マックス・ヨーゼフはバイエルンの政教和約に従って侯爵フランツ・カール・フォン・ホーエンローエ・シリングスフルストをアウグスブルクの司教に任命した。この男は仕事に就く前に1819年に死んだ。

モンジュラ時代の互いに分捕り合戦をした教会主権に関する公布は、特に新たに獲得したフランケンおよびシュヴァーベン地域において反感を招いた。人々は古い宗教的な領域をバイエルン国家に奪われ、その独自の特性を強制されたと感じた。

## 宗派に関する寛容と同権

キリスト教信仰の寛容と同権は変動する時代においてたしかに必要であった。1799年新しい選帝侯マックス・ヨーゼフと共に新しい宗派が公式にミュンヘンにやってきた。つまり選帝

侯はプロテスタント、より正確に言えばカルヴァン派であった。市参事会の粘り強い抵抗にもかかわらず、彼の内閣伝道師シュミットの周りにミュンヘンで初めてのプロテスタントの会衆が形成された。1800年と1801年の二度にわたって選帝侯によりルーテル派とカルヴァン派がカトリックの臣民と同権の市民であることが公示された。新しく獲得したフランケンとシュヴァーベン地域、旧バイエルン（伯爵領オルテンブルク、帝国都市レーゲンスブルク）およびプファルツの一部にバイエルンの選帝侯および国王の主権のもとに多数のプロテスタントがやってきて、最後にはバイエルン王国の全住民の1/4以上になった。

バイエルンにおけるキリスト教の三つの宗派の無条件の完全な同権は1803年1月10日のバイエルンの宗教勅令によって宣言された。この規定は再度1809年5月24日と1818年5月26日の宗教勅令で確認されたが、後者は1818年のバイエルン憲法の付属文書となっている<sup>60</sup>。

## 教会の新しい組織および宗教の改新

あらゆる地域における四半世紀に及ぶ紛争と根本を揺るがす大変動ののち、1814年と1815年のウィーン会議によって再び欧州およびドイツにおけるしっかりした国家の秩序が確定した。ドイツの君主たちは主権に関してもう帝国連合を作らせないよう努力した。緩い統一した形で「ドイツ連邦」が作られた。これは悪い解ではなかった。多くの観点からオーストリアが主導するこの連邦は、末期における神聖ローマ帝国としての密な事実上の連合を意味した。

外的および内的秩序の再建ののち、1803年以来未解決であったドイツの教会制度の問題解決が必要となった。しかしウィーン会議でも、それに続くフランクフルトでの連邦議会でも共同の教会協定は成立しなかった<sup>61</sup>。教皇とドイツの君主たちは特別に交渉をする用意があった。先頭に立ったのはバイエルン王国で、ウィーン会議では、多くを断念したにしても、最終的な外形を整えることができた。

大臣モンジュラの周りは解放戦争の全国的な嵐のあと静かになった。皇太子ルートヴィヒは彼をひどく嫌っていた。1817年2月2日一時はほとんど全権を握っていたこの男はバイエルンの憲法問題をきっかけに、これは本当のバイエルン憲法であったが、失脚した。人びとは彼の執務時代について、それはまるで死者のお弔いだったとか、栄光やクレドや祝福がない、とか評した。この評は間違いではないが、ただ半分だけ真実である。大臣の罷免によって、揺れ動いた、決定的な時代が外面的に終了した。モンジュラはその政治的な賢明さでもって教会関係の新秩序を軌道に乗せた。

1816年にバイエルンの大使として名義司教カシミール・フォン・ヘフェリン男爵が新しい政教和約の交渉のため教皇のところに赴任した。両者の意見は最初鋭く対立した。違いの主要点は司教の座、司教座聖堂参事会および司祭に対する任命権であった。バイエルン政府はこれまで行ってきた国家教会主権を断念する積りはなかった。1816年12月にヘフェリンがミュンヘンに送ってきた教皇の政教和約の草稿はミュンヘンでは受け入れられないと公言された。しかし、いつまでも司教の座を埋めずにいられないこととも認識していた。モンジュラの罷免後事態は急速に進展した。しかし国家教会主権の立場をバイエルン政府は依然として固執した。

彼への指示にもかかわらず老ヘフェリンは交渉において非常に柔軟であった。1817年4月23日彼は政教和約の新しい草稿をミュンヘンに送った。バイエルン政府が5月10日に新しい草稿に小さな譲歩をしたとき、彼は1817年6月5日聖体の日に政教和約に署名した。教皇の代理人として枢機卿国家長官コンサルヴィが署名した<sup>62</sup>。

1817年の政教和約の19の条項は1924年に新しい政教和約が成立するまでバイエルンの教会関係の基礎となった。司教領の境界は、ヴェルツブルクの裁判権管轄区域がチューリンゲンの方に若干拡張したことを除いて今日まで変わっていない。

バイエルン王国は2つの教会管区に分割された。

1. ミュンヘンおよびフライジング教会管区。これにミュンヘンとフライジングの大司教区が属司教区アウグスブルク、パッサウおよびレーゲンスブルクと共に属する。

2. バンベルク教会管区。これに大司教区バンベルクと属司教区ヴェルツブルク、アイヒシュテットおよびシュパイアーが属する。

フライジングの司教の座はミュンヘンに移され、キムゼー司教区は完全に廃止され、同様にレーゲンスブルクの大司教区の地位も廃止された。

八つの司教座聖堂参事会はそれぞれ司教座首席司祭と首席司祭を持つ。二つの首都大司教座参事会はさらに 8 人の司教座教会参事会員を、また六つの属司教区の司教座聖堂参事会は 6 人の司教座教会参事会員を得た。その他に各参事会ではさらに 6 人の合唱隊席助任司祭を置いた。

国王は大司教と司教の任命権を得た。しかし候補者は教会法上の適性を持ち、就任の前に教皇から承認される必要があった。領邦君主はさらにすべての司教座教会参事会首席と司教座教会参事会員を指名するが、しかし後者は奇数の月か教皇の月にだけであった。偶数月には司教座教会参事会員は交替で大司教もしくは司教から指名されるか司教座聖堂参事会から選ばれた。司教座教会参事会主席は例外なく教皇から、司教座聖堂助任司祭は大司教と司教から任命された。しかし国王は初めて司教座首席司祭の任命権を得た。

領邦君主はすべての君主の小教区および教会禄受領者および廃止された宗教的団体（きわめて多数のかつての宗教財団および修道院の教区を意味する）を養う。しかし教会法上の任命（叙任式）は大司教と司教が行った。君主はそのほかに私的保護教区と司教の小教区に対する承認権を得た。大司教と司教は彼に忠誠を誓った。

一方で国家ははっきりと決められた司教と司教座聖堂参事会への扶養義務を負う。各司教区において司教が管轄する僧侶養成所を維持し、十分に資金を提供しなければならない。養成所のない司教区では直ちにそれを設立し、十分に資金を提供する。国家は聖職者の育成に関与することを避ける。司教は教会の権利の基本事項に対して無制限の指導および監督の権利を持つ。司教、聖職者および住民は教皇と自由に交流できる。宗教的な事柄については例外なく教会の裁判所が担当し、特に結婚と聖職者の刑罰についてそうである。国家は教会の訴えに基づいて信仰および慣習に違反する本を差し止める義務がある。教会の財産は売却してはならない。教会は新しい財産を無制限に獲得できる。国家はいくつかの男子および女子の修道院を授業、魂への配慮または患者の世話のために設立し、適切な資金提供をしなければならない。

この合意によってこれに反するこれまでのあらゆるバイエルンの法律、規則および指令は廃止される。カトリック教会の権利および特権は明文をもって承認される。その他の教会の事物および人員に関することおよび政教和約ではっきりとは規定されなかったことは教会の教えと規律に従って取り扱われる。

過ぎ去った時代とまたモンジュラの罷免後も保持された国家教会主権とを考えると、この政教和約の多くの規定がまったく驚くべきものに思われる。その上に政教和約の第 1 項でバイエルンにおけるカトリック宗派が国家宗教として承認されている。これによって宗派の同権が停止される、あるいは本気で脅かされるのではないか？もし政教和約が文面のように基本的に教会法上の権利の無制限の支配を確立するとしたら、国家教会の重要性が疑問となるのではないか？

今ではフェフェリンがこの政教和約の署名を急ぎ過ぎ、権限の限度を超えたことが明らかである。バイエルン政府はここでどう対処すべきであったのか？ローマでは政教和約は直ちに公開された。国王にとって最短でもっともはっきりした解決策はローマにいる大使を召還することであったろう。しかし、この外交的な措置はなにがしかの考慮したのち回避された。大臣レルヒェンフェルトとライガースベルクは一般の抗議に対して君主の権利のためにこれを弁護した。内務大臣テュアハイム男爵は僅かな修正を加え、暗黙のうちの主権の保持のもとに、基本的にこの政教和約の受け入れるよう助言した。首相アロイス・フランツ・フォン・レヒベルク男爵は結局テュアハイムの提案が通るように味方をした。1817年8月7日の覚書で彼はこう述べている。「経験からローマの宮廷との交渉では、通常の契約では当たり前の、双方の権利の正確な規定を期待すべきではないことが分かっている。主要点だけ配慮されれば、政府の措置によって同様に確認された教会の設立を他のカトリックの国々のように期待でき、その際にローマの不当な行為はとっくに止んでいるだろうし、実りが多いであろう」。80歳のヘフェリンは召還されなかった。しかし司教座教会参事会員で首相の兄弟であるフランツ・クサーヴァー・フォン・レヒベルク伯爵が新たな指示を持ってローマに派遣された。

表向きは彼は大使の横にいただけということであるが、実際には突然心配になって信心深くなった老人を監視し、彼の手から仕事を取り上げるためであった。レヒベルクは1817年9月から1818年5月までローマに滞在した。ヘフェリンは教会に関する功績と政教和約を締結してバイエルンの王冠を知らしめたことへの表彰のため1818年4月6日枢機卿の緋色の衣で表彰された。皆の期待を裏切って彼は大使の地位を保持し続けた。1827年8月27日彼はローマで畏敬すべき90歳で死んだ。

この政教和約は少し変更を加えたあと1817年10月24日に国王によって批准された。教皇庁に対してバイエルンの要求を曖昧にはしておかなかった。政教和約の文面とバイエルン政府の意図との間の矛盾から癒すことのできない分裂が生じた。これは丸1世紀も続き、再三教会政策を妨害した。バイエルン政府が政教和約を公開したやり方は明白な不和を表していた。文面は1818年によく公式に発行されたが、それ自身の発行ではなく、特別の宗教勅令の103項への付属文書としてであり、この勅令はこれまでの国王の主権を堅持したものであった。この宗教勅令自体はさらに1818年5月26日のバイエルン憲法文書のタイトルIV第9項への付属文書IIとしてであった。

この政教和約はヘフェリンの署名のあとすぐに発表された。特にプロテスタントと自由主義者のグループでは大変な不安が起こった。賛成派と反対派の文書の洪水が起こった。

1818年3月12日国王マックス・ヨーゼフは宥和する手紙をバイロイトとアンスバッハのプロテスタントの総教区監督とミュンヘンの地区教区監督に送った。彼はその中で以前からの宗教法を守ることを伝え、現在の憲法にある権利の確保を約束した。カトリックの政教和約が単なる付属文書であったように、憲法文書と共にまたいわゆるプロテスタント勅令も公開された。これによって自立したプロテスタントの枢機卿会議がバイエルンのプロテスタント教会のトップに設定された。これまでのアンスバッハ、バイロイトおよびシュパイアーの総教区監督は枢機卿会議に格上げされた<sup>63</sup>。

政教和約がきちんとまとまった契約文書でないことでひどいしっぺ返しを受けた。批准を引き延ばしたバイエルン政府の態度は既に教会関係から注視されていた。この注視は言及されていた宗教勅令憲法文書によって公開されると大きな激高にまで発展した、というのはこの宗教勅令は1803年と1809年の宗教勅令にほんの僅かな変更を加えただけだったからであった。そして政教和約は単にこの宗教勅令の付属文書として公開されたからであった！首相レヒベルクと特に国家顧問官のゲオルク・フォン・ツェントナー<sup>64</sup>は組織的、明示的な法律によって政教和約から危険性を取り除くよう国王に助言した。政府の意図に従って宗教勅令が優先されることになった。カトリックの政教和約とプロテスタントの勅令はカトリックとプロテスタントの教会の内部的事柄を調整することになっていた。しかし、それは政教和約の内容が宗教勅令と矛盾しない限りにおいて有効であった。

バイエルンの政教和約をめぐる争いは内外に大きな波を引き起こした。バイエルンでは特にきびしく教会を意識したいわゆる「同盟した者」の他にも、ヴェルツブルク、アイヒシュテット、バンベルクおよびアウグスブルクにあるさまざまなグループが情熱的に政教和約の無条件適用を主張した。シュパイアーの聖堂祿受領者ヘルフェリヒが1818年9月不一致を仲裁する手助けをするためにローマにやってきた。しかし彼は解決するというよりはむしろ紛糾させただけであった<sup>65</sup>。1818年9月27日ヘフェリンは、争われている宗教勅令はただカトリックでない人に関するものであり、バイエルンのカトリックには政教和約だけが有効であるという声明を出した。しかしこれは問題外であった。この老人はもはやこの仕事に適応していなかった。この説明に対して教皇は公開の演説で交渉の終了を宣言した。1818年10月さらに前年に任命されたローマ教皇大使セラ・カッサーノ<sup>66</sup>がミュンヘンに送られてきた。

ピウスVII世は国王から任命された多数のバイエルンの司教を公表した。しかし紛糾はなおも続いた。1818年11月7日の反対声明でバイエルン政府はヘフェリンの声明を撤回した。というのはこの大使は指示の精神を正しく理解していなかったからであった。1818年11月10日新任の教皇大使セラ・カッサーノは国王に自分の信任状を提出した。彼の立場は当初ははっきりしない状況の中で大変に苦しかった。それにも関わらず政府はバイエルンの司教区の贈与に関する交渉を受け入れた。すべての司教区事務局から代表者がミュンヘンにやってきた。政教和約の有効性に関する争いの他に、新たに任命される司教候補者と司教座教会参事会員に対して両者とも大いに怒っていた。教皇と教皇大使が国王の決めた候補者に異議を唱える

場合も少なくなかった。教会に関する真面目な心配の他に、些細な嫉妬や憎しみによる誹謗が教皇庁の耳に入った。任命された司教の何人かはバイエルン憲法に無条件に宣誓を行ったが、他には教皇の同意を条件にして留保する者や教会の権利を保全することを条件にしたり、宣誓行為を撤回したりする者もいた。

この長い争いは 1821 年 9 月 15 日国王の有名な、しかしまた異論のあったテーゲルン湖声明によってようやく終止符が打たれた。この声明によってカトリックの臣民の憲法への宣誓は民事に関することに限定することになった。カトリックの臣民には、教会の神の法および教義がそれを妨げるときは、それが義務ではなくなった。最終的に政教和約は国家の法とみなされ、実施されなければならない。こうしてバイエルンの教会の新しい組織は実際に実施されることになった。

バイエルンの司教区の新たな設置に関する教皇の大勅書 "Dei ac Domini Nostri" は既に 1818 年 4 月 1 日に出来上がっていた。同時に教皇は新たに任命された司教を公表した。しかし政教和約の実施、新しい司教の叙階式あるいは配置および司教座聖堂参事会の設置は除外された。主な理由は政教和約の不安定さと長く尾を引いている贈与金の問題であった。政教和約では司教の座と司教座聖堂参事会員には国家の資産から定額の年金が約束されていた。これに関する交渉は膠着状態であった。お金による代替の贈与金にとどまっていた - 今日でもそうである。

国王のテーゲルン湖声明の直後の 1821 年 9 月 23 日教皇大使はミュンヘンの聖母教会でバイエルン王国の八つの司教区に対する組織および *Zirkumscription* の大勅書を告知した。国王から 1817 年に任命された何人かの司教候補者はその間に既に死亡しており、ヴェルツブルクの補佐司教グレゴール・ツィルケルがシュパイアーの司教に、またアウグスブルクの補佐司教でエルヴァンクの助任司祭長フランツ・フォン・ホーエンローエ侯爵がアウグスブルクの司教に任命された。従って 1821 年 9 月 13 日の国王による新しい司教の任命が公式となった。彼らはまだ司教叙任式を受けていないので、翌月教皇大使による叙任式が行われ、彼自身または教皇の派遣者から叙任が行われた<sup>67</sup>。旧領主司教の中ではアイヒシュテットのヨーゼフ・フォン・シュトゥーベンベルクとパッサウのレオポルト・レオンハルト・フォン・トゥーエンの 2 人だけがまだ生きていた。

個別には次の人たちが新しく組織されたバイエルンのカトリック教会を率いた<sup>68</sup>。

#### 1. ミュンヘンおよびフライジング教会管区

以前ヴェルツブルクの司教座教会参事会首席であったロタール・アンセルム・フォン・ゲプザッテル男爵がミュンヘンとフライジングの大司教に (1821-1846) なり<sup>69</sup>、それまでレーゲンスブルクの司教座教会参事会員であったヨーゼフ・マリア・フォン・フラウンベルク男爵がアウグスブルクの司教 (1821-1824) に、続いてバンベルクの司教になり (1824-1842)<sup>70</sup>、パッサウの領主司教レオポルト・フォン・トゥーエン (1796-1826) が政教和約のあと終身の個人的免属を得た。しかし彼は、既に述べたように 1804 年以降彼の司教領に足を踏み入れず、死ぬまでの晩年をボヘミアの所領で過ごした<sup>71</sup>。レーゲンスブルクではこれまでレーゲンスブルクとフライジングの補佐司教であったヨハン・ネポムック・フォン・ヴォルフ男爵が司教になった (1821-1829)<sup>72</sup>。

#### 2. バンベルク教会管区

バンベルクの最初の大司教にはアイヒシュテットの旧領主司教ヨーゼフ・フォン・シュトゥーベンベルク伯爵が任命された (1821-1824)。というのは彼を新たに任命された大司教のもとに属司教として置いておくのは良くないと考えられたからであった。しかしシュトゥーベンベルクは同時に司教領アイヒシュテットの管区の管理者でもあった。彼は既に非常に弱っており、死ぬまでアイヒシュテットの住居で暮らした<sup>73</sup>。司教領ヴェルツブルクはそれまでバンベルクの司教座教会参事会員であったアダム・フリードリヒ・グロースフォン・トロッカウ男爵が任命された (1821-1840)<sup>74</sup>。それまでアシャッフエンブルクの司教総代理長であったマツトホイス・フォン・シャンデルがシュアパイアーの司教に任命された (1821-1826)<sup>75</sup>。

1821年10月、11月および12月にまた新しいバイエルンの司教座聖堂参事会が置かれた。これは古い司教座聖堂参事会とは根本的に異なっていた。今は司教座教会参事会員が、一般に市民の出身であるが、司教座聖堂助任司祭と共にすべての教団の仕事の面倒を見た。ただ儀礼上もっと多数の領主司教領の司教座聖堂参事会員に新しい司教座聖堂参事会に参加する準備があるかどうか問い合わせが出された。しかし基本的に彼らは教皇あるいは国王から実際に要請を出して欲しくなかった。ただごく稀に旧い会員が新しい参事会に参加した。通常彼らは私生活では国の年金生活者であった。規則に従って旧司教座聖堂参事会からは司教座教会主席司祭と主席司祭だけが、彼らが存命である限り、引き取られた。

新しい組織のバイエルンの教会は困難で苦勞が多かったが、1821年の終わりに新たな前進を始めた。最初は苦勞を伴ってゆっくりであったが、やがて速度を上げた。実際に政府は依然としてモンジュラ時代の教会政策を続けていたが、以前のような傷を与えるような厳しさは無くなっていた。政府は19世紀を通して政教和約の文言にあまり拘らなかつた。また司教が教皇と自由にやりとりすることも差し当たり問題にならなかつた。教会の公布に対する君主としての同意と *Recursus ab abusu* (教会の判決に対して国王にする上訴) は有効のままであった。

旧バイエルン、フランケン、シュヴァーベン、プファルツが互いに慣れ、理解することは国王マックス・ヨーゼフの穏やかな政治のもとで平和的に徐々に進んだ。この国王はまた晩年宗教的な性格を帯びなかつた。しかし、ロココ風の軽薄な青年期のあと、彼は統治者として内心からの人なつっこさと生まれつきの親切心を示した。彼はこの進歩する時代において社会的公正さに関して注目すべき努力を払った。彼がモンジュラ大臣の執務時期にランツフト大学での啓蒙主義者と啓示宗教者との間の激しい論争を許容したことも見逃してはならない。長男の皇太子ルートヴィヒの教育係にザンブガ (*Sambuga*) を当てたように高貴で明らかに宗教的な人柄であり、ランツフトで啓蒙主義者の勢力の間にザイラーの決定的な人柄を惜しみなく影響させた<sup>76</sup>。

19世紀初頭のバイエルンにおける世俗化の法律文書と、多数の教会に疎いあるいは教会を敵視した措置とを振り返ったとき、選帝侯バイエルンの社会秩序から新しい社会へ引き継がれた二つの基本的事項があることを見逃してはならない。それは教会婚が法律で定められていること(フランス革命以降あらゆるところで市民婚が伝搬した!)と、宗教的な学校教育管理とである。1807年までバイエルンの学校教育を率いた司教座聖堂参事会員ヨーゼフ・マリア・フォン・フラウンベルク男爵は国王と特に親しい関係にあったことは重要な意味があった。フラウンベルクは日付ははっきりしないがある時点から国王の聴罪司祭であった。反対者の強い抵抗にも関わらず国王は彼をアウグスブルクの司教に、それからバンベルクの大司教に任命した。不当だと反対された男は最も賢明で、国王の最善の司教であることを証明し、教皇大使もまた彼には誉め言葉しか見つからなかつた。彼は国王に教会の要求のいろいろな文書を読むようにさせた。モンジュラは失脚したが、フォイエルバッハの宗教勅令におけるその冷たい理性的政策は1818年の憲法にある程度影響を与えた。しかしようやく政教和約が締結された。国王自身が全部のうちどの部分に、どの程度政治的賢明さをもって、どのくらい良心から関わったかははっきりしない。しかし、1821年のテーゲルン湖声明は国王の個人的な良心の証拠と評価してよいだろう。

バイエルンの最初の国王が青年期の性向を完全に失ってしまったことがその後それほど変わっていないにしても、勿論国王の宗教的な個性がヨハン・ミヒャエル・ザイラーに明らかに見られるような宗教革新の強い力であった。バイエルンに宗派の寛容と平等を導入したこの聖職者は彼が育った時代の所産であった。国王の息子で後継者のルートヴィヒ I 世(1825-1848)はまったく異なる決心をしたカトリックであった。彼の政府のもとで新しく組織された教会でカトリックの革新はしっかりと根付き、完全に開花した<sup>77</sup>。

たっぷり10年あまり国家の厳しい罰則により人民の信仰心は狭い教会-儀式的枠内に押し込められていたが、古くからの慣習が忘れられたわけではなかつた。たとえば、引き続き小さなグループで巡礼が行われた。ほぼ1810年以降ティロールにおける不幸な反乱のあと、政府は人民の宗教的感情に考慮を払うようになった。ナポレオンの失墜、モンジュラの失脚、それになによりも1816と1817年の凶作が転換の契機となった。いまや町でも村でも人はもう罰を恐れなくなつた。古くからの巡礼、祈願行列などをせずにはいられなかつた。裁判官や多くの主任司祭たちは苦境に追い込まれた。1817年司教区内の祈願行列が認められた。市民の

ハッケンガッセの窯元の妻ヨーゼファ・ミッターマイアーの主導により同年 170 人のミュンヘン市民が 1 通の請願書を国王に届け、これまで私的にまた小さなグループで行ってきたキリスト昇天日にアンデックスへの公の巡礼を許可するよう請願した。当時警察長官ミュールベルガーは、繰り返し大勢の巡礼が通り、特にシュヴァーベンからの巡礼が大声で祈りながら首都を通過していると報告している。彼らはカールス門から入り、シュラネン広場のマリアの柱の前で祈りを捧げ、それからアルトエッティングの方に向かった。彼らは、以前のように、鐘を鳴らして出入りすることを望んだ。ミュンヘン市民は巡礼グループに対して彼らの祈りを妨げてはならないと強く思っていたので、彼らの邪魔をすることは憚られた<sup>78</sup>。この変革の時代における偉大な精神的な中心人物はヨハン・ミヒャエル・ザイラー (1751-1832) である<sup>79</sup>。彼はシュローベンハウゼン近くのアレジングの貧しい靴屋の息子で、「バイエルンの教会の父」、「あの時代の変わり目における聖人」と呼ばれているが<sup>80</sup>、当を得ている。というのはこの神学者、宗教教育者で司牧者は、教会への厳しい妨害の時代に彼が書いた書物の力で、さらには人々の心を動かす説教の魔法で、また彼の人格の魅力的な偉大さで、彼に備わっている多くのものにより、時代が彼に課した問題を解決したからである。ザイラーはバイエルンの国民だけでなく、ドイツ国民の驚くほど広い層に対して、それを届けることが最も必要なときに、「福音書の証拠」を最も個性的なやり方で届けたのである<sup>81</sup>。キリスト教の基本的特質は、ザイラーが具現化し、手本を示したように、聖書に基づいて、教父と儀式に生きている深い信仰心、教会への誠実な愛、世の高貴で美しいものすべてに対する高貴な開かれた心への感謝である。なによりもディリンゲン大学 (1784-1794) とランツフート大学 (1800-1821) での授業で育った偉大なザイラーの聖職者学校について、ランツフートにおける広いザイラーのグループについて、ヨーゼフ・ゲレスは 1825 年彼自身ランツフートでザイラーに師事していた国王ルートヴィヒ I 世の戴冠式の際に、いわば代表的な証言を述べた。「司教の座にある尊敬すべき人の中で、朝に授業科目で祝福の言葉で自らを試している、使命を授かった人がいる。彼は時代の精神とあらゆる形で格闘した。知識の高慢に対して彼はたじろがず、彼の要求を基礎とした。どのような考えも恐れて除外することはしないし、どんな探求の高みからも落ちたりしない。常に一段ずつ昇ることだけを心掛け、静かに十字架を運び上げ、ときおり誤解されても、心が彼に命じるような精神の誠実と愛の中にあつた。彼は時代の要求に沿い、貴方の良い意図に喜んで向き合う聖職者の学派を貴方のために育てた。貴方は彼に国民とその教育を任せてよい」<sup>82</sup>。天の使命を帯びた人の証言は重い。1852 年ザイラーの影響はもう一般には消え、バイエルンのカトリック教会では違う精神がより強く支配していたが、ザイラーのかつての枢機秘書官で、今はブレスラウの領主司教で枢機卿のメルキオール・フォン・ディーペンブロックが次のように書いている。「11 年間自分は途絶えることなく彼と交際してきた。最後の 8 年間は彼の最も近い家と食事の仲間であつた。神の前で保証するが、自分は彼のことを小さいとか、同等でないとか、威張っているあるいは虚勢ばっているとか思ったことがない。またイライラさせられたとか、落胆させられたとか、腹が立ったか、気持ちを傷つけられたとかしたことがない。ときに深く傷ついた、あるいは落ち込んだとしても、我を忘れることはなく、感情的に行動することがなく、常に自身の品位を保ち、常に自分の前に模範を示す人が立っているように思う。彼によって高め、作り上げ、学ぶことができる、キリストのような人である……。彼の内部生活をくまなく照らす秘密は常に神が存在することであつた。<sup>83</sup>」

ザイラーの人生行路、1794 年領主司教領アウグスブルクのディリンゲン大学における彼の罷免と処置、1819 年教皇による彼のアウグスブルクの司教承認拒否、皇太子と国王が彼をレーゲンスブルクの司教の座を与えることができるまでの彼の相当な苦労は、カトリックの革新の時代に影響を強め、世紀が進むにつれて闘争的な教皇権至上主義によって目指した、教会の強い別の力を裏付ける。レーゲンスブルクの神学校長、聖堂主任司祭で補佐司教ゲオルク・ミヒャエル・ヴィットマン (1760-1832)<sup>84</sup> は、疑いもなく敬虔な男であるが、既に教会の宗教と聖職者の教育の別のタイプを具現している。精神的な責任に対する彼自身の解釈からヴィットマンは、神学校の寮生を陰に陽に監視するという危険な事柄は絶対に避けるという古いシステムを実行した。どのように人に接したか、どのように聖職者を育てたか、という点でキリスト教者として生きたザイラーとヴィットマンと違いは、1826 年レーゲンスブルク近くのバルピング城で司教ザイラーが尊敬する国王ルートヴィヒ I 世に地方滞在でもてなし

た際のエピソードに見ることができる。シャルロッテ・ノイマイヤーはその目撃証人として次のように語っている。「司教区が拡大し、また悪路のため必要となって、騎馬を持つことを許されていた一人の聖職者がそれに乗っていきさか不幸な状態でバルビングにやってきました。というのはこの栗毛の馬は彼が最近買ったのですが、ここに来るまでに彼を2度も放り出したのです。この出来事と彼の取った措置はもちろん話され、ディーペンブロックは馬の取り扱いについて助言しただけでなく、この助言を実際にやってみせることになったのです。この馬がいかに素早く自分の主人を認識し、美しい跳躍と立ち馬をするかを見るのは楽しみでした。城中の人が窓からディーエンブロックの乗馬術を見て感嘆しました。突然思いがけずレーゲンのヴィットマンが城に乗り付けたとき、これには特にザイラーが父の誇りと弱みをもって「神は彼に高貴な姿を与えた！」と見下ろしながら感嘆していました。この高名な人がそのとき示した困惑を思い出すと思わず顔が緩みます。ディーペンブロックは素早く馬から跳降りたので、見物人は驚いて頭の引っ込め、ザイラーは見たことがないほど困惑していました」。また友好的で宥めるようなヴィットマンの言葉も周りの人から突然消えてしまった愉快な無邪気さをもう取り戻すことが出来なかった<sup>85</sup>。

ザイラーの影響は、全体として新しい、より闘争的で、時折より狭量な風潮が現れた19世紀40年代に終わっていた。40年代にまた最終的に50年代に、より厳しい風が吹き始めた<sup>86</sup>。新しい司教の世代がバイエルンでそのあとを継いだ。彼らの多くはロマーノ・ゲルマニウムで教育を受け、明らかにザイラー時代から離脱していた。アイヒシュテットとミュンヘンのライザッハ、パッサウのホーフシュテッター、レーゲンスブルクのリーデルとセネストライ、ヴェルツブルクのシュタールのような司教の名前が新しい時代を刻んだ。ザイラーの精神は人目につかないところでのみなおも生徒たちに受け継がれた。彼の聖職者学校は信仰心の篤い国民を作り、旧バイエルンの遺産を確実なものにし、おそらく気づかれずに今日でもなおも生きている。

## 参考文献

1. Der Überblick beschränkt sich auf die Entwicklung innerhalb der Katholischen Kirche. Generell wird verwiesen auf: G. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer Freising, Passau und Regensburg zwischen Säkularisation und Konkordat (1803-1817), München 1959 (mit Quellen u. Lit.). Zur bayerischen Geschichte und Kirchengeschichte dieser Epoche allgemein: M. Doeberl, Entwicklungsgeschichte Bayerns II<sup>3</sup>, III, München 1928-1931; H. Rall, Kurbayern in der letzten Epoche der alten Reichsverfassung 1745-1801, München 1952; R. Bauerreiß, Kirchengeschichte Bayerns VII (1600-1803), Augsburg 1970; M. Spindler (Hrsg.), Handbuch der bayerischen Geschichte II-IV, München 1969-1975.
2. K. O. Frh. von Aretin (Hrsg.) Der aufgeklärte Absolutismus, Köln 1974; F. Kopitzsch (Hrsg.), Aufklärung, Absolutismus und Bürgertum in Deutschland, München 1976; E. Weis, Der Durchbruch des Bürgertum, 1776ß1847 (Propyläen Geschichte Europas IV), Berlin 1978; Ders., Der aufgeklärte Absolutismus in den mittleren und kleinen deutschen Staaten (ZBLG 20) 1979. 31-46.
3. Doeberl II<sup>3</sup> 290-335; L. Hammermayer (Spindler II) 983-1102; H. Graßl, Aufbruch zur Romantik, Bayerns Betrag zur deutschen Geistesgeschichte 1765-1785, München 1968; A. Kraus, Der aufgeklärte Absolutismus in Bayern (Regensburger Universitäts-Zeitung) 1969, H. 3, S. 19-24; R. Bauer, Der kurfürstliche Geistliche Rat und die bayerische Kirchenpolitik 1768-1802, München 1971; F. Prinz, Max III. Joseph - Ein glanzloser bayerischer Kurfürst? (ZBLG 41) 1978, 595-606.
4. F. Kreh, Leben und Werk des Reichsfreiherrn Johann Adam von Ickstatt (1702-1776). Ein Beitrag zur Staatsrechtslehre der Aufklärungszeit, Paderborn 1974.
5. G. Pfeilschifter -Baumeister, Der Salzburger Kongreß und seine Auswirkung, 1770-1777, Paderborn 1929.
6. G. Schwaiger, Die Aufklärung in katholischer Sicht (Concilium 3) 1967, 559-566; Ders., Die Theologische Fakultät der Universität Ingolstadt (1472-1800) (Die Ludwig-Maximilians-Universität in ihren Fakultäten I, hrsg. v. L. Boehm u. J. Spörl) Berlin 1972, 13-126, bes. 99-126; A. Hoffmann, Beda



Aschenbrenner (1756-1817),. Letzter Abt von Oberaltaich, Passau 1964; R. van Dülmen, Propst Franziskus Töpsl (1711-1796) und das Augustiner-Chorherrenstift Polling. Ein Beitrag zur Geschichte der katholischen Aufklärung in Bayern, Kallminz 1967, 78-83, 295-316; Ders., Zum Strukturwandel der Aufklärung in Bayern (ZBLG 36) 1973, 662-679; F. M. Phayer, Religion und das Gewöhnliche Volk in Bayern, 1750-1850, München 1970.

7. Doeberl II<sup>3</sup> 335-379; L. Hammermayer (Spindler II) 983-1102; P. Fuchs, Karl Theodor (NDB11) 1977, 252-258.

8. G. Schwaiger, Pius VI. in München (1782) Münchener Theologische Zeitschrift 10) 1959, 123-1356.

9. R. van Dülmen, Der Geheimbund der Illuminaten, Stuttgart 1975.

10. Vgl. M. Spindler, Die kirchlichen Erneuerungsbestrebungen in Bayern im 19. Jh. (HJb. 71) 1952, 197-211; Ders., Der Ruf des barocken Bayern (HJb. 74) 1955, 319-341, Wiederabdruck; M- Spindler, Erbe und Verpflichtung, hrsg. v. A. Kraus, München 1966.

11. Z. B. besonders eindrucksvoll bei Christoph Selhamer [Stadtpfarrer von Weilheim], Tub Rustica, Das o: Neue Gei-Predigen..., Augsburg 1701, 162-165.

12. Vgl. G. Schwaiger, Stolgebühren und religiöses Brauchtum Bayerns im Zeitalter der Aufklärung (HJb. 86) 1966, 311-338; Ders., Frömmigkeit im bayerischen Raum (Spiritualität-Meditation-Gebet, hrsg. v. J. Gründel) München 1974, 108-128, 220-222; B. Hubensteiner, Bayerische Geschichte, München 1977<sup>6</sup>, 259-326; Ders., Vom Geist des Barock. Kultur und Frömmigkeit im alten Bayern, München 1978<sup>2</sup>.

13. H. Schindler, Große bayerische Kunstgeschichte II, München 1966<sup>2</sup> (Taschenbuchausgabe, II, München 1976).

14. O. Rieß, Die Abtei Weltenburg zwischen Dreißigjährigen Krieg und Säkularisation (1626-1803) (Beiträge zur Geschichte des Bistums Regensburg 1975).

15. W. von Hofmann, Das Säkularisationsprojekt von 1743. Kaiser Karl VII. und die römische Kurie (Riezler-Festschrift, hg. v. K. A. von Müller) Gotha 1913, 213-259; R. Reinhardt, Zur Reichskirchenpolitik Papst Benedikts XIV. (Röm. Quartalschrift 60) 1965, 259-268; M. Weitlauff, Kardinal Johann Theodor von Bayern (1703-1763). Fürstbischof von Regensburg, Freising und Lüttich. Ein Bischofsleben im Schatten der kurbayerischen Reichskirchenpolitik (Beiträge zur Geschichte des Bistums Regensburg 4) Regensburg 1970, 312-315; Ders., Der Kardinal von Bayern. Ein Kapitel bayerischer Reichskirchenpolitik im 18. Jh. (29. Sammelblatt des Historischen Vereins Freising) Freising 1979, 63-99.

16. K. O. von Aretin, Heiliges Römisches Reich 1776-1806. Reichsverfassung und Staatssouveränität I, Wiesbaden 1967, 46-51, 137-147, 375-391; L. Hammermayer (Spindler II) 1043-1053.

17. P. Chevallier, Loménie de Brienne [Erzbischof von Toulouse] et l'ordre monastique, 2 Bde., Paris 1959, E. Weis, Montgelas 1759-1799- Zwischen Revolution und Reform, München 1971, 7; VI/1, R. Aubert (Jedin VI/1) 7-9.

18. Schwaiger, Pius VI. (wie Anm. 8) 123-136.

19. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 6-13; L. Hammermayer (Spindler II) 1098-1102.

20. R. Huber, Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789, I: Reform und Restauration 1789 bis 1830, Stuttgart 1967<sup>2</sup>, G. Schwaiger, Das Ende der Reichskirche und die Säkularisation in Deutschland (Kirche und Theologie in 19. Jh., hrsg., v. G. Schwaiger) Göttingen 1975, 11-24.

21. Doeberl II<sup>3</sup> 381-574; Schwaiger, Die bayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 38-110; bes. 3-86 (E. Weis, Die Begründung des modernen bayerischen Staates unter König Max I., 1799-1825) (Spindler IV/1 u. IV/2) (Sonderausgabe 2 Bde., München 1978); Weis, Montgelas (wie Anm., 17); Ders., Napoleon und der Rheinbund (Deutschland und Italien im Zeitalter Napoleons, hrsg. v. A. von Reden-Dohna) Wiesbaden 1979, 57-80.

22. L. Doeberl, Maximilian von Montgelas und das Prinzip der Staatssouveränität, München 1925.

23. Doeberl II<sup>3</sup> 461.

24. A. M. Scheglmann, Geschichte der Säkularisation im rechtsrheinischen Bayern, 3 Bde., Regensburg 1903-1908; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 1-37 u. ö.; Ders., Das Ende der Reichskirche und die Säkularisation in Deutschland (wie Anm.20); Spindler IV/1, 11-15, 38-46; A.

- Langner (Hrsg.), Säkularisation und Säkularisierung im 19. Jh., München-Paderborn-Wien 1978; D. Stutzer, Die Säkularisation 1803, Rosenheim 1978.
25. Dobmann, Georg Friedrich Freiherr von Zentner als bayerischer Staatsmann in den Jahren 1799-1821, Kallmütz 1962, 44-52.
26. Schwaiger, Die bayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 29f.; N. Backmund, Die kleineren Orden in Bayern und ihre Klöster bis zur Säkularisation, Windberg 1974, 97f.
27. Scheglmann, Säkularisation (wie Anm. 24) II 369-374; J. Hemmerle, Die Benediktinerklöster in Bayern (Germania Benedictina II), Augsburg 1970, 313-318.
28. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 90+93.
29. Vgl. Scheglmann, Säkularisation (wie Anm. 24) I 180-187.
30. Bericht Darchingers an den Freisinger Fürstenbischof Schroffenberg. München 26. 1. 1802. Archiv des Erzbistums München und Freising B 50 p. 120-125; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 28-35.
31. Berichte des Pfarrers Johann Nep. Kammerloher an die Geistliche Regierung Freising, Sulzemoos, 9. u. 11. 7. 1802. Archiv des Erzbistums München und Freising B 50 p. 586-596.
32. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 371-374.
33. Ebd. 20-37, 368-398.
34. H. von Treitschke, Deutsche Geschichte in Neunzehnten Jahrhundert I, Leipzig 1918<sup>10</sup>, 184, 186.
35. Johann Christoph von Aretin, Briefe über meine literarische Geschäftsreise in die bayerischen Abteyen, hrsg. v. W. Bachmann, München 1971, 51.
36. Rieß (wie Anm. 14).
37. Vgl. Klöster und Orden im Bistum Regensburg, Beiträge zu ihrer Geschichte, hrsg. v. G. Schwaiger u. P. Mai (Beiträge zur Geschichte des Bistums Regensburg 12) Regensburg 1978.
38. J. von Görres, Politische Schriften V, hrsg. v. M. Görres, München 1859, 180. Zu den geistlichen Fürstentümern des Reiches im 18. Jh., besonders über ihre Leistungen in der Förderung von Kunst und Bildungswesen: E. Weis, Der aufgeklärte Absolutismus in den mittleren und kleinen deutschen Staaten (ZBLG 42) 1979, 31-46, bes. 40-43.
39. Protokoll der außerordentlichen Reichsdeputation zu Regensburg, 2 Bde. Beilagen zu dem Protokoll der außerordentlichen Reichsdeputation zu Regensburg, 4 Bde., Regensburg 1803; A. C. Gaspari, Der Deputationsrezeß, 2 Tle., Hamburg 1803; A. Scharnagl, Zur Geschichte des Reichsdeputationshauptschlusses von 1803 (HJb 70) 1951, 238-259; von Aretin, Heiliges Römisches Reich (wie Anm. 16) I 372-452; die gediegenen Arbeiten von I. Rinieri über die Säkularisation in Deutschland verzeichnet bei Aretin II 403; Jedin V 533-554.
40. L. Hübner, Beschreibung des Erzstiftes und Reichsfürstenthums Salzburg in Hinsicht auf Topographie und Statistik, 3 Bde., Salzburg 1796; (Josef Ernst von Koch-Sternfeld), Die letzten dreißig Jahre des Hochstifts und Erzbistums Salzburg (Abdruck aus der Zeitschrift von und für Baiern) München 1816; G. A. Pichler, Salzburgs Landesgeschichte, Salzburg 1865; H. Widmann, Geschichte Salzburgs III (1519-1805), Gotha 1914; J. Schöttl, Kirchliche Reformen des Salzburger Erzbischofs Hieronymus von Colloredo im Zeitalter der Aufklärung (Südostbayerische Heimatstudien 16) Hirschenhausen 1939; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) bes. 142-148, 173-177; J. Wodka, Kirche in Österreich. Wegweiser durch ihre Geschichte, Wien 1959; F. Martin, Salzburgs Fürsten in der Barockzeit, Salzburg 1966<sup>3</sup>; G. Kren, Die Säkularisation der Chiemseeklöster (Das bayerische Inn-Oberland. Organ des historischen Vereins Rosenheim 34) Rosenheim 1966, 1-183; E. Wallner, Das Bistum Chiemsee im Mittelalter (1215-1508) (Quellen und Darstellungen zur Geschichte der Stadt und des Landkreises Rosenheim 5) Rosenheim 1967; H. Marquart, Matthäus Fingerlos (1748-1817). Leben und Willen eines Pastoraltheologen und Seminarregenten in der Aufklärungszeit, Göttingen 1977.
41. Bericht des Chiemseer Erzdiakons Augustin Fuchs an das Generalvikariat Freising (Prien, 1808). Archiv des Erzbistums München und Freising B 797 p. 54-56.
42. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) bes. 111-121 (Fürstbischof Schroffenberg), 173-209 (Bistum Freising); Ders., Die stillen Jahre Freisings und seines Domes (1803-1822) (Der Freisinger Dom. Beiträge zu seiner Geschichte, hrsg. v. Fischer) Freising 1967, 239-257.
43. Nachweise bei Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 178f.

44. Erkunde des Erzbischofs Colloredo. Wien, 14, April 1803. Archiv des Erzbistums München und Freising B 49 fol. 90.
45. Schematismus der Diözesangeistlichkeit des Bistums Freising für das Jahr 1816, Landshut 1816, S. XIV.
46. K. Schottenloher, Der bayerische Gesandte Kasimir Haeffelin in Malta, Rom und Neapel (1796-1827) (YBLG 5) 1932, 380-415; B. Bastgen, Bayern und der Heilige Stuhl in der ersten Hälfte des 19. Jhs. (Beiträge zur altbayerischen Kirchengeschichte 17) 2 Tle., München 1940; L. Litzemberger, Der bischöfliche Informativprozeß des Münchener Hofbibliothekars Casimir Häffelin (Römische Quartalschrift 50) 1955, 230-247; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 87-110, 399-404; G. Franz-Willing, Die bayerische Vatikangesandtschaft 1803-1934, München 1965; R. Bauer, Kasimir von Haeffelin und die kurbayerischen Landes- und Hofbistumsbestrebungen 1781-1789 (ZBLG 34) 1971, 733-767.
47. F. X. Schwäbl, Lebens-Skizze des Hochwürdigsten Herrn Joseph Jakob von Heckenstaller, Landshut 1833; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 177-209.
48. Regensburg, 19. November 1824. Archiv des Erzbistums München und Freising B 81.
49. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) bes. 54-87, 148-172, 245-296, 307-319; Ders., Das dalbergische Fürstentum Regensburg (1803-1810) (ZBLG 23) 1960, 42-65; Ders., Carl Theodor von Dalberg (Münchener Theologische Zeitschrift 18) 1967, 219-233; Ders., Das Erzbistum Regensburg unter Carl Theodor von Dalberg (1803-1817) (Beiträge zur Geschichte des Bistums Regensburg 10) Regensburg 1976, 209-227; Ders., Regensburg. Zum geistlich-weltlichen Profil einer bayerischen Stadt (Deutsches Stiftungswesen 1966-1976. Wissenschaft und Praxis, hrsg. v. R. Hauer, H. Pilgram, W. Frhr. von Egloffstein-Pölnitz) Tübingen 1977, 67-81; Ders., Die Benediktiner im Bistum Regensburg (Beiträge zur Geschichte des Bistums Regensburg 12) Regensburg 1978, 7-60; Ders., Pietas. Zur Geschichte des Bistums Regensburg 13) Regensburg 1979, 7-17 (mitneuester Literatur).
50. N. Buchinger, Geschichte des Fürstentums Passau II, München 1824; F. Riemer, 100 Jahre Priesterseminar und Priestererziehung in Passau, Passau 1928; F. X. Eggersdorfer, Die philosophisch-theologische Hochschule Passau. Dreihundert Jahre ihrer Geschichte, Passau 1933; M. B. Wagner, Die Säkularisation der Klöster im Gebiet der heurigen Stadt Passau 1802-1836, Passau 1935; E. Ringelmann, Die Säkularisation des Hochstifts und des Domkapitels Passau, Passau 1939; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) bes. 122-142 (Bischof Leopold Leonhard von Thun I, 210-244 (Bistum Passau), 303-307 (Priesterbildung)); Ders., Opfergänge im Bistum Passau am Beginn des 19. Jhs. (Liturgie, Gestalt und Vollzug. FS J. Pacher, hrsg. v. W. Dürig) München 1963, 316-323; K. Baumgartner, Die Seelsorge im Bistum Passau zwischen barocker Tradition, Aufklärung und Restauration (Münchener Theologische Studien I 19) St. Ottilien 1975; A. Leidl, Der Weg der philosophisch-theologischen Hochschule Passau. Vom Jesuitenkollegium bis zur katholisch-theologischen Fakultät der Universität Passau (Ostbairische Grenzmarken 20) Passau 1978, 5-14.
51. A. Hasler, Bischof Karl Joseph von Riccabona und seine Zeit (1761-1839), Passau 1928.
52. Eigenhändiges Briefkonzept Sailers (an Georg Oettl) aus Regensburg. Bischöfl. Ordinariatsarchiv Eichstätt c 47a.
53. H. H. Hofmann, Adelige Herrschaft und souveräner Staat. Studien über Staat und Gesellschaft in Franken und Bayern im 18. und 19. Jh., München 1962; Spindler III/1 443-450; IV/2 914-920.
54. Zum Bistum Bamberg in dieser Zeit (mit dem wichtigsten Schrifttum); J. Kist, Fürst- und Erzbistum Bamberg, Bamberg 1962<sup>3</sup>, 128-137. Dazu Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 418 (Reg.).
55. E. Buckl, Joseph Graf von Stubenberg, der letzte Fürstbischof von Eichstätt (1790-1802). Phil. Diss. 1. Teil veröffentlicht im "Heimgarten", Beilage zur Eichstätter Volkszeitung-Eichstätter Kurier, 21. Jg. (1950) Nr. 2-15. - J. Sax, Die Bischöfe und Reichsfürsten von Eichstätt 745-806 II, Landshut 1885; J. Sax-J. Bleicher, Geschichte des Hochstiftes und der Stadt Eichstätt, Eichstätt 1927<sup>2</sup>, F. X. Buchner, Das Bistum Eichstätt, 2 Bde., Eichstätt 1937-1938; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 419 (Reg.).
56. L. Güntner, Der Übergang des Fürstentums Würzburg an Bayern, Leipzig 1910; K. Diehl, Die Freiherrn von Fechenbach, Aschaffenburg 1951, 29-36; W. Engel, Aus den letzten Tagen des Hochstiftes Würzburg-Fechenbach und Stadion in Meiningen (1800/01) (Mainfränkisches Jahrbuch 6) 1954, 253-

- 262; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 424 (Reg.); A. Wendehorst, Das Bistum Würzburg 1803-1957, Würzburg 1965, 9-23; O. Volk, Professor Franz Oberthür, Persönlichkeit und Werk (Quellen und Beiträge zur Geschichte der Universität Würzburg 2) Neustadt a. d. Aisch 1966.
57. A. F. Ludwig, Weihbischof Zirkel von Würzburg in seiner Stellung zur theologischen Aufklärung und zur kirchlichen Restauration, 2 Bde., Paderborn 1904-1906; Ders., Gregorius Zirkel, Weihbischof in Würzburg (Lebensläufe aus Franken 1) München-Leipzig 1919, 533-550.
58. A. Steichele - A. Schröder - F. Zoepfl, Das Bistum Augsburg, historisch und statistisch beschreiben, Augsburg (1864-1940); Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 418 (Reg.); H. Witetschek, Studien zur kirchlichen Erneuerung im Bistum Augsburg in der ersten Hälfte des 19. Jhs. (Schwäbische Geschichtsquellen und Forschungen 7) Augsburg 1965; Ders., Der Augsburger Bischofsstuhl und der bayerische Staat in der ersten Hälfte des 19. Jhs. (Jahrbuch des Vereins für Augsburger Bistumsgeschichte 1) 1967, 59-86; E. Deuerlein, Das Bistum Augsburg zwischen Säkularisierung und Wiedererrichtung (ebd. 2) 1968, 107-127; Spindler IV/2 914-923.
59. H. Raab, Clemens Wenzeslaus von Sachsen und seine Zeit (1739-1812), I, Freiburg 1962.
60. M. Simon, Evangelische Kirchengeschichte Bayerns, 2 Bde., Nürnberg 1942, in 1 Bd. 1952<sup>2</sup>, G. -A. Vischer, Aufbau, Organisation und Recht der Evang.-Luth. Kirche in Bayern I, München 1953, 18-24; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer, 58-62, 402-405; C.-J. Roepke, Die Protestanten in Bayern, München 1972, 336-341.
61. A. Doeberl, Die bayerischen Konkordatsverhandlungen in den Jahren 1806 und 1807, München u. Freising 1924; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1); Ders., Die Kirchenpläne des Fürstprimas Karl Theodor Dalberg (Münchener Theologische Zeitschrift 9) 1958, 186-204.
62. M. Frhr. von Lerchenfeld, Zur Geschichte des baierischen Concordats, Nördlingen 1883; R. Hindringer, Das bayerische Konkordat vom 5. Juni 1817 (Theol.-prakt. Monats-Schrift 28) 1918, 4-32; K. A. Geiger, Das bayerische Konkordat vom 5. Juni 1817, Regensburg 1918; Bastgen, Bayern und der Heilige Stuhl (wie Anm. 46) II, 1011-1014 (Lit.); Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 399-407; E. Weis (Spindler IV/1) 71-84, - Text des Konkordates (lat.-deutsch) in der offiziellen Ausgabe der "Verfassungs-Urkunde des Königreichs Baiern", München 1818, 345-395; A. Mercati, Raccolta di concordati su materie ecclesiastiche tra la Santa Sede e le autorità civili I, Rom 1954, 591-597; L. Schöppe, Konkordat seit 1800, Frankfurt a. M. - Berlin 1964.
63. Lit. wie Anm. 60.
64. Dobmann, Georg Friedrich Freiherr von Zentner (wie Anm. 25).
65. M. Bierbaum, Dompräbendar Helfferich von Speyer und der Münchener Nuntius Serra-Cassano. Ein Beitrag zur römisch-bayerischen Kirchenpolitik und zum Vollzug des bayerischen Konkordats im Jahre 1818, Paderborn 1926.
66. H. Bastgen, Der Bericht des Münchener Nuntius Serra Cassano über seine achtjährige Tätigkeit in München. Zugleich ein Beitrag zur Ausführung des bayerischen Konkordates vom Jahre 1817 (Mitteilungen des historischen Vereins für die Pfalz 50) 1832, 129-189; B. Zittel, Die Vertretung des Hl. Stuhls in München 1785-1934 (Der Mönch im Wappen) München 1960, 419-494.
67. Zum Streit und zu den Verhandlungen zwischen Konkordatsabschluß und Vollzug der kirchlichen Neuorganisation: Bastgen, Bayern und der Heilige Stuhl (wie Anm., 46) I, 175-201; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 401-407.
68. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 405f.
69. P. Sieweck, Lothar Anselm Freiherr von Gebsattel, der erste Erzbischof von München und Freising, München 1955.
70. H. Witetschek, Studien zur kirchlichen Erneuerung im Bistum Augsburg in der ersten Hälfte des 19. Jhs., Augsburg 1965. Dazu die Arbeiten wie Anm. 58.
71. Siehe Anm. 50.
72. G. Blößner, Bischof Johann Nepomuk von Wolf 1821-1829 und seine Weihbischöfe (6. Jahresbericht des Vereins zur Erforschung der Regensburger Diözesangeschichte) Metten 1931, 40-50; Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) bes. 183-185. 250, 277-296; J. Staber, Kirchengeschichte des Bistums Regensburg, Regensburg 1966, 177-182.
73. Siehe Anm. 54 und 55.
74. A. Wendehorst, Das Bistum Würzburg 1803-1957, Würzburg 1965, 35-43.

75. L. Stamer, Kirchengeschichte der Pfalz IV, 1801-1918, Speyer 1964.
76. Ph. Funk, Von der Aufklärung zur Romantik. Studien zur Vorgeschichte der Münchener Romantik, München 1925; M. Spindler, Joseph Anton Sambuga und die Jugendentwicklung König Ludwigs I., Aichach 1927; H. Schiel, Bischof Sailer und Ludwig I. von Bayern. Mit ihrem Briefwechsel, Regensburg 1932; Ders., Johann Michael Sailer, 2 Bde., Regensburg 1948-1952; R. Hacker, Die Beziehungen zwischen Bayern und dem Hl. Stuhl in der Regierungszeit Ludwigs I., Tübingen 1967; H. Graßl, Aufbruch zur Romantik, München 1968; Ingolstadt-Landshut-München. Der Weg einer Universität hrsg. v. B. Hubensteiner, Regensburg 1973; G. Schwaiger, Johann Michael von Sailer (1751-1832) (Katholische Theologen Deutschlands im 19. Jh., hrsg. v. H. Fries und G. Schwaiger, I) München 1975, 55-93 (Lit.); Ders., Vitus Anton Winter (1754-1814), ebd. I 129-161; H. Marquart, Matthäus Fingerlos (1748-1817). Leben und Wirken eines Pastoraltheologen und Seminarregenten in der Aufklärungszeit, Göttingen 1977.
77. M. Spindler, Die kirchlichen Erneuerungsbestrebungen in Bayern im 19. Jh. (M. Spindler, Erbe und Verpflichtung. Aufsätze und Vorträge zur bayerischen Geschichte, hrsg. v. A. Kraus) München 1966, 40-54; Ders., Dreimal München, ebd. 24-39; G. Schwaiger, Zur Geschichte der Frauenklöster nach der Säkularisation (Münchener Theologische Zeitschrift 14) 1963, 60-75; Ders., König Ludwig I. von Bayern (Zeitschrift für Kirchengeschichte 79) 1968, 180-197; Ders., Die bayerischen Benediktinerklöster im 19. Jh. Vom gewaltsamen Untergang zu neuem Leben (Studien und Mitteilungen zur Geschichte des Benediktinerordens 87) 1976, 24-36; Ders., Die Benediktiner im Bistum Regensburg (Beiträge zur Geschichte des Bistum Regensburg 12) Regensburg 1978, 7-60; Spindler IV/1 87-223; IV/2 914-925.
78. Schwaiger, Die altbayerischen Bistümer (wie Anm. 1) 381-390.
79. Siehe Anm. 76.
80. Funk, Von der Aufklärung zur Romantik (wie Anm. 76) S. IV.
81. P. Hamann, Geistliches Biedermeier im altbayerischen Raum, Regensburg 1954, 9; G. Schwaiger, Das katholische Priesterbild der neuern Zeit (100 Jahre Priesterseminar in St. Jakob zu Regensburg, 1872-1972, hrsg. v. R. Mai) Regensburg 1972, 37-51; Ders., Seelsorge und Frömmigkeit im alten Bayern (Zeitschrift für bayerische Kirchengeschichte 47) 1978, 56-68; Baumgartner, Seelsorge im Bistum Passau (wie Anm. 50); M. Probst, Gottesdienst in Geist und Wahrheit. Die liturgischen Ansichten und Bestrebungen Johann Michael Sailers (1751-1832), Regensburg 1976.
82. Schiel, Johann Michael Sailer (wie Anm. 76) I 318.
83. Ebd. 730.
84. G. Schwaiger, Georg Michael Wittmann, Bischof von Regensburg (Bavaria Sancta, hrsg. v. G. Schwaiger) II, Regensburg 1971, 316-331.
85. Schiel, Johann Michael Sailer (wie Anm. 76) I 670.
86. Vgl. H. Brück, Geschichte der katholischen Kirche in Deutschland im neunzehnten Jahrhundert II: Vom Abschlusse der Concordate bis zur Bischofsversammlung in Würzburg im März 1848, Münster 1903<sup>2</sup>, M. Diepenbrock, Trauerrede auf den Hintritt des Hochwürdigsten Herrn Franz Xavier v. Schwäbl, Bischofs von Regensburg, Regensburg 1841; F. Schnabel, Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert IV: Die religiösen Kräfte, Freiburg 1937, Neudruck 1951; K. Buchheim, Ultramontanismus und Demokratie. Der Weg der deutschen Katholiken im 19. Jh., München 1963; C. Bauer, Deutscher Katholizismus. Entwicklungslinien und Profile, Frankfurt a. M. 1964; Hacker, Beziehungen (wie Anm. 76); K. Jockwig, Die Volksmission der Redemptoristen in Bayern vom 1843-1873 (Beiträge zur Geschichte des Bistums Regensburg I) Regensburg 1967, 41-408; Hundert Jahre nach dem Ersten Vatikanum, hrsg. v. G. Schwaiger, Regensburg 1970; W. J. Hahn, Romantik und Katholische Restauration. Das kirchliche und schulpolitische Wirken des Sailer-Schülers und Bischof von Regensburg Franz Xaver von Schwäbl (1778-1841) unter der Regierung König Ludwigs I. von Bayern (MBM 24). München 1970; Katholische Theologen Deutschlands im 19. Jh., 3 Bde., hrsg. v. H. Fries u. G. Schwaiger, München 1975; Kirche und Theologie im 19. Jh., hrsg. v. G. Schwaiger, Göttingen 1975; Kirchen und Liberalismus im 19. Jh., hrsg. v. M. Schmidt u. G. Schwaiger, Göttingen 1976; Zwischen Polemik und Irenik. Untersuchungen zum Verhältnis der Konfessionen im späten 18. und frühen 19. Jh., hrsg. v. G. Schwaiger, Göttingen 1977; O. Weiss, Die Redemptoristen in Bayern (1790-

1909). Ein Beitrag zur Geschichte des Ultramontanismus, München 1977; Ders-. Der Ultramontanismus. Grundlagen - Vorgeschichte - Struktur (ZBLG 41) 1978, 821-877.